萬乃一露　やよろ里紙　六

12
881
54

あはれとものしたまひてひそかにさとしなれなりけれ
也　中君の心也
一月の猶しくの御にふかひのうちを　中君の詞也やはらぎ
あは清書給ひ給ふとの給也
まんのまくもをほしれ我からそなしにたは思ふるもの八
しなえたにそてうらやましは行しさにもいとはしましたの給
う　薫の志をうまくしもとものの給ひそにものを中君
るし給ふ也　中君の心
いたく志をとこてもさくしほのかに文中ほ候はとせんなく
あね　中君の詞入あねのちきとあう
いとうれしくも給ふ御事またやうにやすくさもとうけ給ふてまれ
しまぬ世の御物語ともくる物ことの給へハ　薫の詞也
あはとおほしてもとうしかくしつまするを給ひけるひとく

給ふ御色もさてひたひらはつかれともうちなれくいとこそ
めてたう侍りし
中君の歌也
宮のはんへるにはりわさうねりも侍とおほしめけるを
かひとしうとの又なくさめともまこにこそ侍ると申し給ひて
おもふと女君そ人のゆうしめしさなとはおりてそうらひ
申す給へるこし御色もおしねし
匂宮の歌也
薫の御宮れもはまてん侍おりしまほとにこそさ
あしみとく匂宮と中君れうとく如中にかひたまし
給て宗下心有くも又八宮にの給く中君とまる
くさめんの歌也
たく世やたられなすとやうにこそもて知らともくれまさら
ろうて山さとにわくさ海うわすり行へとおほしくいと
給んころまとくの給

八宮
世やうれへや八はしの海士れは藻よもむ出れぬらくさ
そまりしもむひとのかまりもそてはころさはるまうさ
ありに侍るやたるはありたんこ行くもやくさま給くう
のはけるしなまえてとひくあんまく侍るへき
薫の詞也
さらもえてすそしもそうひめ有とむり給くもるとおほ
し地せんまいてとおしく侍りあん
さやうになく八中君
うたくひめおうとくみもうれなとこ給やうよ白文
おほし御八おしくらんや薫卜給也
はさうおうまくさみちの侍とも申とくちもむらへもおり
らうく侍くまうんよ行れもくろとくけ侍くんうしや
もしくよ仙せころの御と八宮もうれこてもかへうのとこ
かひみうしおりく八やまうしかさうくやさとこけて有らく
のおけおく道給やうに手よふたまく八たのとくろむらくハ

さんやの薫の詞也
袖ふれし郷やとらう人さまほしきさやかのあつし行くやらく
くらゝをあつりゆくまゝておもひぬるに　薫の詞也　中君を
よ哉へあそはしくやうしたと也
引哥　花くはしめもされや世中と背しあつけれあまりとえもん
いとうれさくおほして　中君の心也
さうしこう紀もなやましのよのとゆうとえまうしくおもひ
給ひらん程りなふ事もとらゝえて給ぬるなしむなはろ
いとくちおしかれともにうくともおもひくらうおほしすへさえさらい
やまけくなしみちのくさもとりもとうそうりを給しん
かゝやまき行人ハ忠ちいうとむして　薫の詞也　宇治へ
八宮おほんと中君のさにおもふまれハいつも
二の月ちをとあめまてはゆうちれにともあもしてハひ白給れ

たいとを中そてこそよふらめ　中君の詞也　八月ハうされ
九月一日の程也
あかつきよの程ハしたをとくしをとの給ふ事のいつくしも
給うたをたならぬ郷とはいまうともしけし思ひそらうたにえて
これつくあの給ひつるしけれまとのもとされのえてさまろをやしとう
とよひて浮紐とゝへり女さうやわかれし思はぬ何事
をいひもんまの色いたそていとしもよからぬ行人ハなまたつき
ていとなれかをかたいおつくハ内りのふうもをひつゝ行へう
白雲のゆかしなくておもと薫のその給ハうとうくしぬと
のゆへみれ詞也
あうもや　薫の詞也　文りお後かくハなれとよんも
思ひくハよろ人をおかれ事もかけ成り是しきはそへ
見うちとゆきのしさやんともちもしくせおり白とをれみも

わかぬと仰られけるしるしやと侍従へいひしもつまづき田ちらと
そのはかなけれはかくも見えひかりぬるゆゑめでて思ひけめて
見る中君の宇治へかへり給へるすと思ひくすなへき
よの給ふしと薫の家りわひ給へるすと思ひくやの
給やうにみるすしてゐるも見えて左様りけるに浮いひり
耳にとふるも　むわかきやハの給事申はいふもやの
御色思ひくしそよりしめやかに宇治への事よの給ふをきそ
思ひれしてわかぬるにふるすしてとくみるく知つきて
もやうしんちくまるくらけ給ふるてめんとうつり
あてみるとのうちに人入侍るやとに
まことにきんと也　　こうくるとさふらひてとく
しるしや　湊へし
あひのかみりは汁んの花の都へのこかへんとよあきく

しとおもめてあさねる君をしきこなる　中君の詞也
あくうるとゝもなされいふと打しけれと　薫の心也
こまもはかるおそろしるへかとうとのそこへのんと
薫乃詞也
いかにへとも思はしめようし　宇治にて一夜交ゐしるも
なかし人のはねうしも宵し物といとあてされくお浮しあるに
そ中くうして行をも見くしるとめきまうし花紅をわた
思ひやとく思はせとていとのとやうにまてなし行くまて月
こゝのくやしやとまうらんうちれくおしきまてなつゆく
けさとはかくしやかひはしも給はでゆるはつあ宵したる
あかぬり　大君の中君をゆるし給ふるも
せんすなきうへしとよのはしや　中君乃詞也
中くひきたにん思ふけらんへかるも色るうし見知つさまく

てならひ給ふなと　うしろめたくおもふにも薫をさして云
　うしろやすき中見れは也
ちゝ宮の御わかれのゝちはひめ君たちのひたちにとらせき
きたの方しきしまのうへは南の方のきたるをとらひ
あはれ　　薫の詞也
兄の給ふ事もこそあれと給ひまゐり給ひたに申させたまひと兄
中納言の御かへりことはてかく申させ給ひのまへととゝく
くやしき事ゞも又申され給ひたまひけれはちかくさふらふ女房
なとさふらはれけると　　宇治にて一品の宮御方へまいりたるに
まく給へるおとこ君ちかくにさふらはるゝを君ハ御覧しなるそ
とも見たまひしかれとこそは給はぬ中なりし給はあらぬひたちのみめ
まかりやうにそさはしめ給ひたに申させ給ひてさふらひしたまひ
また見る文ぬるそ　人まてもにくしと兄あるおもとを見らる

たのもしき事也　中君の御事をさしてよそれ批判也
いとをしや
おとこ君ハ御かへりとらへうつりの君のひろさゝたとへいひとも
はかなきさうらひ人あれともむかしまたおもふさるる御心の
ようにはあれともなほいひとふひのまへにてもまてそうしやうし給へ
さうとうり　薫ハ中の君の時より心をかあらへかたれにとも
みやこれをちらへ海ちかもとえらむかたらむつくきこらんけ哉
御の式アらいつるを　かさん人あることをれの前しるも
ひたちの御うしん人めれあるハたなきさとこへしよ給ひなりしひあし
みなめそ給ぬきまこうひを思ははしとあり月もちかくあれより
うち給へんとうもみ人まやわかんやしき見うしきさも女の治
たのあれいとわしなくそうし　薫の心也
たなやましきたにいとかうあつら給ひしとうりやくらつと

ちかくとおほしたりける　薫も中君の懐妊の
事をいへり
ちかきほとにわかゆくへきかたをおもひやりて　下ル事
の事也
やとりぬる夜　宮ハすきたる人の様とも深ハ有ましき也
御のおとゝ御しれんやと思ひと情なくん事ハなきといへとは
いかなる人にしてたらぬ紀のかんのこゝろなまめきておふ
くらたるんをはらひく夜心やさしくしをあらためんかたう
なれとなく思ありつん猶もんはくしに女れなるくおほし
とまりんことよろとさうしをとなてやられを　薫の宮
人をうらとの儀也
いさのまもとこひしなそへけりあらきとなる　宮ノ中君
とゝあらく久人のこゝろしきのん也

さらぬたにくへとあやまちしをおほし給ふともとくあやうて
なる心ありや薫すまとハもとしゆゑやさてあてまらうた
きとありはらあらひるとハあらそれまたりとおほしと
あり給ひあるこく紀してはしふかくとおほしとさてな
つらにたりや給ひとわきまへしきにおほひくあるとこさ
とやうなしのまてまつしなとこへとまきに宮ハゆるし
給ひてんやはりとて思ふなそさいとおんあらんいかさ成
すしてうは人のおんくるしうして　はらふかくハ
てく文字あらるへし
この世くるしと心もあくうきて成るあて給ひまきいと事
うきなしそこに深く文ありきいのうへをあさやうれ給ひて文
あく　思のゆくへき　んのなくさまんとれ儀也
いさりにおほしたの露節をあてしわけ給ふ秋の色の事

薫大将はかくとも知らで秋ハ宇治へわたりたまはんや
みちの程へとも宮御覧ずるにも宇治までの一夜
のうちもまことそらごとのひの空にまきれて宮御覧じ
給ふなるべし
浮舟しきの御文ハことにかくしぬはしきのとちなんさとし
さやうにもれなむと宮御覧じあはれ人のまへにもとも
と見ゆらむつれづれ人しく思ひしに夕暮れハ　ただ宮は中君
をはしきとやの心も御覧しそれんとさやうなる文字も
打ちつけ
我もと宮御覧ぜしぬ物ならずしておとりまさりぬつきなん
うけ給りぬ　中君の文とも
いとあやしけれてえやみしさせたまふとも我は思ひつつと
あまりにもとももく子ならぬ姫とわかくしてゆくら
まつの浮舟ひのこころしくそひのそら思ひもてし世中

とありつきあやさまざまのあさましきをかりなしとは思
ひ給へはるかにあさましき　中君ハすくなからぬ人とも
いかにもとはあしていとくるしくもてつくしきなけ
しきもそひくさ浮舟なけくしぬひあへしく人なとし
ていとし給ひほとのあさましさむくは心まうけてかしく
御ゆめも　中君ハいまとちかき人ゆゑてきたなきとも
かたりすもゆふしくみはいとおほくまさらせてとらせてもあ
宇治の一夜の時まてもさし秋の浮舟をさらぬたるを
さりとて薫の心も
なかなかはかなき宮かけて行きなはあらむのまし人をもしろへ
これらをあはれ　白雲の中君もとひはちて中君は
かれにて行く薫のたのもしくへりなんとも
ゆくゑもあらぬくらきをさきあやにはかなくあらし　と思ひけり

まことにひまもなく人なけれんのとまりもてなしそあはれなるにた
このことのはともおほゆるかなしくしぬへきなるや
これハ中君は匂宮のうれしさて給ともかなしくりけ
又薫の心あはひ給まつしきとおもはれん也
さもあらんと思ひをにくさうしろめたくおもふと
それ批判也　ゆくりなくこれなくや　薫のうたかひ
男やいかなる御うしろめたき事ありておとくよ　これも批判の詞也
なけれ人のきかれしさはいかなるれとみくいとくるし
こまやかに八なき事あり　大君の事也
これハおもはぬいまそかめしうちまつりたるふ事こ女たちよろしう
おもはしく人のいみしきくみも　中君の心のかは
りなきふとれ薫の心也
うちにはれたまうをてもよほしうちはすまそていとうしこ事うく

おほせ也　中君も匂宮のやうくしきを思ひて薫をもに
うらみも思はす心にあはれとおほしいるとハ又匂宮の心の事
ようもあひ出るをとくいふやといふ心なるへし
又月比はあはれは薫の心をうしろめたくおほされて
みえたまひつるさましなるへし　中君人の心を句宮
の給ふ也
たまふ様なとてあるさまもとひて忘れし　中君の心也
山里の思ひやりにも其のとしく人の思ふ人もうしろめたき
こゝろをひたすら事々も思ひ給ふ世中いとくるしくおもひ
らまにてなかはいとうらみたるけしきなり　中君の心也
給人からも給はく薫ともそあはれのもしき人もいとをしき人を
思はれたれ人下へくらはれハうらく人をまかへおほえ也
なくなしそへるをこゝろかはりまいりて思ひつゝある人と思ひて

まいとらうたきにうつしさ給ふ人をてあひたまへれハ
うれふる済せあ婚ハ女あふくろ山しさはよのかたちも郁
倉れおん狐ら白家ひかりさかしきを見らそてあらん
忠おほ給て中家のへんも
いとる哀りう紛しく哀給さ更て日比のかくこあり申と限り
なくのたひ給ふくとむらしつくうにたちたまれ
さら給ふるしれわひの心ならぬをれあの絵さと
いとあはれに　白家のへんも
まうる人とあらくてもえ給ハさりきされとめてしく
さへ哀給しなり　白家のへんも懐姫れ人乃ふも
うらきぬ心あくひ給てこゝろのまゝに申さくまつう
しくわ給ふらくましにわかるなとくもとつきせぬ
ちきりの絵とさくいつけてと　六条乃ミくら思れ

ゆめしきあはれさえもたへぬあれたるの院ゆとたな
えさとの白宮のへんも
かくのこさとよをわたらりやあらんと　中家のへんも白家
のと絵をあさしハさんやなくにと葉をとすくの給ひ
なほすて業乃心をもとおり給も男といふ婚ハいふきも
かく給りあるまのそ心とふりしうと給へんも
あかいうたりつくへの世おもしきを思ひて参て年比哀
なる心さへとえもひとさるとはまうと　中家業乃さ哀之へ
くく絵おさあてき　業の下をとふへり
あイ
くるま紙をもあるましき事とみて給ひ　業の下をも同
心をかくるまし給ふと中家さ給ともれ
この院ゆくされのたあハ心てやうと思ふあらしとももうしみてもあ
まけるを　中家のへんも白家らる君はんとてらしあらし侍

り給へるなるへしの給ひきさはあるましきことハいひ
あらはしきこえ大将の先祖あれとは宮の御心にて白
宮をはなれての給ひたに耳とゝまらすとやいてやなと白
大臣の給へるすゝろにもあるましきことの心也
そこもあさましき事に思ひめくらして入まうし給ふ
中宮の心也薫の事わりなきさまにすゑうちなれは思ひ
すてみきれからへ給事なとも
むかしの人よりもくらうなる思ひの事なとかなる事給ふ心あへ
そさはあらくなれと給ふこゝろにもなくさめらる事も
けりもしうちをあやしくはうりひさしき事にてと
大臣のおほき薫中宮り給給ふ也
〓きしを〓給ひ給へるかいと地折そろしうへく給ひ
こ給人 中宮の心也白文六宮の事ふのこゝろ給て

久しくさ給給て薫の心よく思ひてしなさこ給の
ゆかりのかんとも
こゝに出くる人の事と思ひかつかならすとハなとてしまつり
なさたにまてあすし給ふる御文をいとく深りなくなる哉也
ゆかりしたるに　中宮御文出して後の給ふとも
前にうりは白文をとまつりし給とも
彼人の事はりなれてとふくさき給へるやうの心されうり
れりたる也たちしめる御ありとみゑさまうひなると
薫のうちうれ中宮文をまゐらると白文の不審
し給ふ也
その為れ人ましおそもされハあやしとゆめみて給へとゆり
ありしことおもひしなとり給り　白文始とれ
あさきとの仮也

ことのかにまてなれまゐらせしあれをいつらんかくてなく
ありなくていとゝくしやわりなきを　中君の心也
ゑあはれひ給ふぬ也
されはよう御らんにてなるにはみ前なんのほとたくみ給ひし
と　白君の心也又給りこのあれなくもとたるに
あひ給ふぬるにはあしくとの心也
といかゝるに我らしやはかんさまえけるを　白君めて
薫とうらひし心也
さるはむとくの御我ともぬきさうく給ふあられとおやしらん
まうけふて身ありえこにある　薫の白ひの毛を
たうけてそもはぬきうく給つ道と御かれくらにとあ
もろ宮名えん也
かくろふてはのこる也有くしとあしくとまうけりや

みくらとの給はくるに思ひしく　其給はえてたかるに
あれはあひ給ふ事は一え也との白君の心也
身我をよそ本かえ　中君の心也
思ひ又ゆるにきしとたるか物給　白君の詞也六君よ
きあひ給へとも中君をは一晩みるに物をとめ給也
又乃我思ひ白君ほとさに給ひて中君をも思ひまさく前
よろし有しこと也
ありしえさえよるをくやうにくらえむくことさくことにそ
河也
打給
人の礼は我こそさえよこおあ清ひ道なえとしと給ひたのまん
おもしき人みとしそさやうれこともそいさうれ給か
とたしありうてさや中君は我給にて薫よ心をとう
はし給るよりも所中はさやうけたるか物をとも也

と業平朝臣の家に侍りけるときにむかへられける
は次まそひあさりてやそてうちきむさき泛へさらのやとに
川原同弁人の事ハあれしてさかりとるあは近き也
人をはやめの中むけあれにのやまとあそこにしれける
とふふきうくてとにそ歌をあれる御中なとにハさむ
ありのかくしき事ハあるへくはなや
又時雨をとさ給ふうりれ秋やちをぬる思のかはらうりける
此よれとむへくまかなへとあしきいと行き見にやう
給へととともかくもいへ給ふぬさへいと給へく存
白氏文集乃絹也と絶り年月とも在たる事も見ゆ百六
日此ちたる代とのんや
又人ありなれ者乃神のようり喜ぶ氣あまりて悦けるに
白宮弁　慧乃ありちたと白氏の事なるあり悦

むかしとの人也藤原敏行朝臣のもとに給ふ給也
女のあさましくのの給ひけるにいかへさうくもとあそ
をいふ也　ぬさなくてはいふことの儀也
見えかれぬる中将殿とあめのよるをかそてやるをきるあれ　ぬん
中将也　中将の家をは白氏あり別なりいとを見れ中
将殿なるたられはとれらのりありるよりあれんとも
給ふのとやそうるをにあをとの歌人なるかこのうり
あをと御なし給ふとの儀也　むみられぬ人あり
なれなるかかるうちかへまうるとや在道をとうはり
あそりよ歌人なる也
かくてうちなれ給へるこしされけるとなくあられあるを
見えたとのうれたそうしいと也中すしたてられをはる
あるとはし給そいなめしなはんあるやさしとにかし

さわやからぬ身を世にかへりみんことも思ひたまへてし
らへたまへにんの御こゝろさしにつけて此ことゝもうしかん
あそびのみちにつけても世のかたかなしく此文のけしきを
みのしたかひて御はらからにつきそひて〔ならふ〕事とも
うれしくそらし　白菊の人也中君の御かた可〔尋〕
まうてくる薫を包むとも思ふとも〔思〕へん也
とあさりそくにつけても〔言〕ことをさとはしとやかくも
うちさへ〔あ〕まりしれむしきあやにしたがふ〔まじ〕ね　あり
こなたの中の君のこと西〔対〕まて也
めけりしかは　夕霧の大臣のおんめくりしはるとも
よろこびなからまいる心地してくれとも〔思ひ〕そへ
こたちらをまつへしていとこゝろにしみてはまれ
白菊の人也西対の君也

君はあやうかたはらにもよせまし　中君の御やうに
〔な〕をくもしたまへる也
あまりにもなりかしこまりてえさらぬれ〔給〕つる〔侍〕ちに〔御〕こゝろ
たてまつるもいとよかりし〔身〕を　表ハ紅裏ハ蘇芳又表
も紅梅裏ハ青
ことゝしおもはすやとたえせぬ人のもの思ひたまふらぬに
〔物〕をひとつかれとも　白菊の人也又思ひける也
をおとらさすもわかれたまつりもつましきはんなし
のわたりの〔な〕かるあたり　中の君はそのかたに〔心〕あるとも
ちらかす〔の〕たまへりし　むつましきはとたまへんものこ
まはりのかたてもかくしたりしもものをこのころそ〔き〕さたり
まいらせし心よくあらうつりてあはれおほしそもの御けはひ
いつもまちこれいちしるのをみぬほどにあなつましきはかなく

らうたけなるをこれ　匂宮の心也中君の様とあり
なまとく人めはおほくまさつるにおほさるゝまゝにこえと
六君より中君ハおほくまさり給とや
ちうの鏡なと見るおもしぬ人のあたらしくひきよせひきつくるに
御せうとのつらしと思ひとゝめひきとめやかんなれんハつてう
をくみちに思ふんかあしうもえつおほえあへさるかなかくはかなき
おいてくさまの文はいんなるひとりおほしてみ事にはまはしは
すんなきくきこえたる様なるを文なとや有とちらしさけは
しこうしおりやうの物ともちりきたなくてさうし給へるを
さる物とも有し
しろかねもよ　中君を他人の兄くいたく思はさる
　薫をと見るかなやうはもあ文おもしろんとや
たゝいとをもくすくにものもくあすて　薫の文のこと也
なほくしまれとそわさとも文けまふし物はとりまな

あとしてもあるとはやしまて給ていとうのこハあらしらし
めこうそうの御くに　なほとくしき　紙なちなぬ文の事
いとくらはやをくうれおほさるゝをそとりの御もとし
　まつ薫を数しうまなさいとしやや
おのゝれもしきともおもん女の事と思ぬ人さまを
　薫のうるや匂宮れん也
なまてうこのおほはちしまれたんいとうれおかひあまハ
かくこみて思ふをおもんしと思ま我もとしくらんた
しるを後さるか御母たまをつとやをとうくもりそれハそうの日
をえいて給ひは六条院みは渋ちゝなそ　中君の薫
　をとさゝしきれあしとや
やくるもこてひなれ給をとりの様有情めるのてとれくな
らんとつけやく　匂のうちなる六君へ匂宮より故父の御
やう

むかし人ともあり中納言の君ハ八宮のひめ君をおもひいてゝ
またも思ひましをおほしいてゝるとなしや中の君のありさま
しのおほしまさり　中納言のさるへき人とはなやかに
うちもえのみ思ひあまりてしほるゝとおほしおもふに
やとさうらふて思ひなして　匂宮と薫の御中らひおもひ
ものおもくしなへて新しさまうしろさいなまれおほさん
ことうちも
さきのへいえ御心にしのびかねていつもおもひたゝさもあり
匂宮六君ゝいとかしこきのみおもひさしそさせ給ふ中
君をよにたえよひ給ひぬと薫のうれしきとや又説
中君の薫とうちさよやうの給へとも一向のなえ
ならぬることゝおもひ給ふ心ことにいて
人くれをとひるとれなかりし給ほとにさ人そとためりし

さとにやり給ふ　中君をされへも
女宮のほかにまかり給ひて　女三宮の御ちなり
よ給しおかまへりとてかしかしやさらにほかうへさ事な
むかしの給へも　薫の御也さとかれ給る発来なと
かすまかしき也
是れの左ん月のほとしれまうしにおろそか物となやなしさ
そのかはさとかれさをおもひてそ御すきにとて
めとの給へも　是ハとは後年九月なとに女三の宮
八講をとりおこなひて人清事の日ことの如ある
中の給也前年に二たひ行八講行給ひ見へし
たり給も女三宮のし給はすやと御説也聞也
あはれ薫の心のうへ八講をこの日ことと見へてまつり意
のためにもくさて八講なとさ御給しるのありさま

様の法事とは九月にもし給ふべきを心もとなくたりけ
ならひとてとくとよくうちゆくとも待らればかゝんかはかなさとうひ
有とて　薫の詞也
心もとなき度るといひ出てとも行て女のおもひかへすとも知られ
くもりなく日かけとなりまくたゞ有ほどもひとくかゝるかき
ぬれやかなるとこちとうし給　心もとなき度　紫式部
さてさむさ雨をといふ
まつりし此御まうでと思しかはしかゞ　中の君の心紫式部也
まかせてうにあり所　薫の御を網ならひを中の君に
気しかせらるゝや
くれなゐれにうらめしくてなしめでたきあやとさとたまく
あまくさうち行つるた　あやのうらみや
さる後の色とはなくさとあふことにのうしありけるかた　念とく

いふるもたくさの色のるや
ちりのひとりあの後をおもひもとひきくて
てらしくかや見色をりうしぬそて女の色をとさる時朝　さの色あく
色物也　花　のよしの事也
ひもひるる契りとも下にも後たく一もちらにうくやくはかる
薫の君中の君と当まうさ初音待しかあるといふ情や
はもおとは薫の色よたくひるあそとれ一つするとは給
ましさ中の君の後や心さらうにもとうすゆくるや
大輔の君とて知られくしきくのむつましきおるたにはるも
をと
中の君のされ女房や
くりあんなちさうのりんくる給さはつきしくうしてまてりくして
あとのねて　薫まうとも大輔かくの給詞也可秘哉
了枝様あれとのへや

ゝきまうれハ思ひやらるれと　中将へ参る事也
ちこ丹くはくことも上さとや　前よりくるまに入る
極の一段なる也の縁也
津け覧せさせ給ひてさくともかやうなる御ん志らしひ給はは
のことうてめなれはたまはりもしるへきなりへし　女房
なとのはらいたる撫子を仕中将まいりものするれハ
大輔君とりちらしてはらのいたとや
紫しろふ花れするとおもしねハいつくやもとひよひてそへ
くりとりちらしるかしはたまはしとのくさしめひなまたは
ひきしろうや
わかんくれは前ちらくはらいつるなとをそとりまかれ
てハはくろひそうへきこともはへとものいてくるへきなり
はる姿ともなとハ志ろしあをきるとみて　大輔

是乃んはらひや
もちえんみしみえ中くめ中をとうけ給　あしんなり
ぬ乃んやさのゝ詠藤りさる花の中く紙合たると此縁也
まれの八何事をとしうしろゝ哭極うへのあしん文字を誌る
あらぬ清むなしの花とみくよろゝいとのそてぬる御用ゐとゑて
なましと　蓋なしてそれのかやのんや
こゝろなかちらく此事まてとゝいかハ御同しなえんなり
をたく　白氏文集と志る行なぬとや
人りのとうしはうまいてあらうかを詠へれと　白氏文集なるや
世中打あら後さゝしなことゝいつれ安ものとも志る行なぬこと
かるとや　白氏文集ともしさるもと文さひしき事
をえん志る詠乃ぬとや
えんりそくしろうさむく　白氏文集の風流よきさうくさ御んや

花の露ともてあそひて世はなくへき物とおほしめされ
とよみ給ひし　哥　白氏文集　薫る事と猿猴とて画様白猿と
物ほとくへのそめられはとのつれなしよはきりしまのや
かれ葉なりけるもあつかひなきを訪ひてかりうくめつる
うたなる事なあれと　中君乃ためにも白氏をもちくの
ことなるも茲よあかりのひ給とや此段算子の地や
此てやるとそしらりき大君はゆるかめれとたまとらも有なり
かくらへるとの也なりあさやかにぬれ物かくうちまつりとあると
しめる紙も女君はいとあつしうへ中く大谷も有なまよ
とあるかゆるとへしまほせおほせとるなか文あしとあり
ぬかり
薫乃茲たるに白氏乃人さしとくら宝度
薫のまうるとれ心り此てやるとく白氏あとそし給や
うは中君のあはれにたなとらつるも有とや

ましてはれて世りたりまなたる御宿物乃花やうさに
大君乃法縁なるもるも
御おほえれうちの人乃見ともてともへをあすれるよとおほ
しみてうるよせそひくあけりしき紙　白氏の御う
たのへれともとをつし花とや
中納言乃君をいとおしきもとの中し給へたうとうくんおもり
あはれなく御しもそくしかるへきたんをなくひの御あれ
薫の中君へとのもとあしきゆるをてゑくらきや
御かはるゆへは御けはと給ひはちくしもさてか御なり
此をあらくおほしなく見たるむるへやおもんとおほまとな
つとあり
中君へあまりくくしるやうのへさしあるる
とおかはくりきやうやされと御あはれをまへと
もしゐるへ中く人の見ともあひ事もいつかおほし

て乃薫の事也
いにしへ又まへの心も紀伊たてる物とも也させを行て此て
うちまて思ひせ　おもしろくたまてひそ争てせらるく
又さる薫よりて紀物とも中天へさらてせんとて関
さらし給ふとや
あやのまうけをゐるとして給ふ　まうせハあやなと
乃織賃とはらんなる事也まうハ料足也
この歌しも聞く文字も知らるとゆかしき給ふ後家さとはて
つきたてらまてかさもた給まてんれうもしせと思ふを
ましきあてある心ちへるおもふれぬれと　薫れる也
白文字花の露ともてあそひるなと悲哀に聞くら給へ
名也あまた薫ハ右れ乃ることとるへきやうまされと見
色おもしやうにそくら給と也

この所にれ法山ちとことみそめ給しよりと聞きさせしさ不のある
まさなは法さことありけりとせんくあしくあはさまてなく
文字れ世紀も思めくらしかくまつたまさけとも思くひ給り
夢也　薫は八雲乃法給ふを見給くゐるを世中れは
されとも志る給と也
いとれしの人あらうしやと聞く　八雲のたかいとれしきと也
また法ふ弁と薫の見んあらひ給てこまう奴るをとしるを
給へるも弟子れ根也見も給の武ア乃筆法奴へし
あく文字給ゆてしう給やもく思ふとしおくへてやとあんと
とある色志てとうは心よりるのてくるしきれハ法すとあるを見
しるるとハこともやうかくとももされも無ひあまりたりくしき
こともてうちゆ給と　中天のるをとひ世まんやもされるも
知りまてさうらぬと也

女君はとましてなてとそひまたる身也物けしあけの御ひとく
ありしぬへきかハお姉君の給ひしとものしめなめ給しも
なからんすともやもとかる人にも我昔より給ひしなるまめのとくへ
ありなしひさて今は心もなきあらくなくんをも中くへ心え
あらぬ人しもはの人に何ささるめもあらぬ御心ちへ有様此哀
と思しぬ子にはあらもはりとそてんかりしかりにあひしらん
をいとけしまして心りてさせ給へりしとよろつりしをきこえ
給さらぬ梅人くもまさし地のいふかひ有ぬへくまりやうなる
事
　白氏文集のこと給さへあらに又薫の心のうち給さきこえとの
そひたるとや又統文の世に心にや
みれあさし　中君の心也新宗の女房はるにや
見んなれたるもこあらは此山里の者る女たちや思給へとも同し
んすなるしもいひ何事人さへのたえ比まくに

いかめしへよりけんてや
こひめ君ととり物やさ給へぬ物りなし　大君のことや
おかさまし人此人もう御心とさく給ひまりやといひとかれ
しをも宮の御しくなくなり給えんあけさしるをも
大君の御命なくて薫をもあつり心さてさく給ましき
とれ中君の心也
此事いとく給しをも物情也　中君の心也　白氏文此之
かれなるよりとハ薫の下心あらかともむつましきと此縁也
おもと君をもしあて思ひまうくまいの志あやうなる御文つる
おりしたり　薫又中君へたより給也
やうてもしに此志をねかしいてさを行て　此庭のうちや
いとなやましきほとふくらん君中君にさもぬとそへして
中へ出し給へる紙　中君の此給細也

さくにいふ人をはるく宮源のおちぬ人に紙人めよはく見え
たしかにそてまさくりして　　蕉の心也
なすやまを給はりき　　蕉乃詞也
ちらぬ便るとをちらく葉りするをよとしくしきもれはらり
てもみをのうちにはさみし姫まいくやさかくへ行くなる
ゆせう鏡ふあんなひするに心地も所との絡て　　蕉乃詞なり
あれくしうくぬ便又きくをしきしると後へちりのまゝなり
かたに香はらふくみをのうちに入給ふとめしられようとなり
いと細しきとなる紙　　蕉の新曲とれん也
ひとよりもまのくもしきみえしくくきたいと見ゆるしをを
えんめりやてまやれみをとうちわろして　　前句蕉の案
給し時よるをありし女房のとく中宮の戻して行を
笑ありしをひく蕉をうちへいれしなるを

よるのそらのさえにいれなうつ紙とんなに君さまにいうちも
いとくらしされと　　かれをする人とよふひの便とはいふ也
人のうくいうけきちえんなんをもかくやはくまうしされ
たるのうなうにほうしるさうといそくたいめし行へいとほの
たるくはの給はけりひの　　中宮の意也なちえんおの絵を構返
むかしれんの　　大宮のる也
まやい給へうしころまゝ思いそてら句にも接し色られ
くそのさくらは心地し行人はとほにも描きえいされを
大宮の御中と給時の部なり中宮御給人をいそくしき
とる蕉の心也
年めくひてそ半し給よまれくわくまう給へるもいとつう
白てもされたくうるとは情をとをくこしをしいまてん風かれく
しきたちのまゝより給り　　蕉意分も描とえの給を

ぬハ大君乃うすさとおほしいて云也
いとくちをしくかれたるさまなりしを思ひ出ておもはるとの給ひし人
をもくよもむつまてもひらんつれをもちしをさくらや
の給をもすく　　中君のん也
むかしそわさ人あるはくらしをゆう物をとうちなけきて
るたいまとう給ほとも言まみそ　　薫乃詞也
ゆきもとくらぬ　　薫のん也　弁　花のかも中君の御とみを
たゝ　弁　下のきとくらぬハ中君乃御とみなと
いつまれんくしもはかりなやましくおほえらん
薫の詞也
人りとひ給はさうしてきぬちハあしらまれたく久うは
さわありるとしてそとし給へり　　懐姫のうすを薫れ
人りとひ給也

あまりもつゝくしきまてなさきを給ふなめりかしその給
ふり　中君乃わさなかりしきさや
いとあらしくて　中君乃心也
むかしいかとりもなくおくらきハ給ふ　中君乃詞也
女かしれ人もさしそて御物給ひかなく覚ましきくのをそ
わつさとうくも心ひきくめ給とその給　大君も胸を
おもひしと中君乃給也
また非もみ年ん松なりぬせ給と思ふはいとんくらうを
御弁　うくもせぬてみるかれをぬり非をもみ年ん松なりなくに
象なれも　　　薫乃心也
このもとをたのくのきらんもはくまゝに
かねらるゝ也　　　薫のん也
かさかうてまきもちん事しとてそとうりとくむなしも

といひかはしたまふをとをく何の御ありさまをみはなちきこえさせず

かく　何事もはべりなん薫のこゝろを行へも定めなくて

の一夜の事ちかひしはやとぞおぼしけるとや

人にもみえたらましかばもやすからまし世の中もくるしう

なりぬるを　おぼすとも思ひよられたてまつらんやう

ありの給ひし

まことにありがたき御心ざしよりもなど身をくだきて　おもひやりてるや

何事もつゝまでこそ君の御こともはかなき人のことの思ひ出る

薫の御やうなる心にては大君の事ゆゑ

ゆかしき人ありし程より世中をおもひそれまでやはおはしけん

はかなくひとのこゝろしひ給ひしに　薫の御やうなるおもひあはせて

御心をも出家の事を思ひしとや

来る人ことにや給はんとこれは待つらんかた見えてひたすらに

えたまひし　先世の宿縁にやとぞ

一昨日は御前の御ことを思ひさだめたまはぬかへしはやしのほかの事ん

大君の御有様にもゆるしたまはぬにたゝひ給ふとや

なくさめもやらでたちにおもひしきをもゆるさずはしりて人

の有様をみるにつけてはさるにてもやおもひなんとて

よろづの御心をうちかへしおもひやり給ふをはなぐさめつゝも行き

さりげなくよ給ひけりとは給へるにはへ　薫の御やも大君の

給ふ人にもおもひよらはんとおぼしくらぶればまかりさうらふ

御心は我こゝろもはすなるにはなくさむるもちらぬとや

人のひくはれはなしぬかさ御心もさりまで〜よれ

かきくらさんとおもひこまれと　やゝともされたる中君の

御心も大君とやいひとはるまゝしきとはされともえ

といひさめあなとのなかやも又給はんの御心をこれはなりなるとて

はたんのうはこひのあひもくまぬとの心とや
あさましき人のを言ともおもふべくはこ見めさ侍しかるあ
常に心をかへずておもんはかるその蓬の宿や
たゝかたくなき心ありてつゝましくさゝやけとも世にしき給ふを
語りるとしてあさましくなくの語りきかんをうれへにまかるに
あはれ　たゝあさましくれ給まで　思ひとれ給ふまでの事や
世の人のあらぬ心の程と見えみる人もまたかう御きかしくつゝきを給
うちやらでおほしのれ給へと
めんなき物とせられんも心うくおもひなしおのつからまうでき
とのんや　蓬の宿やまちとも思ひさ
うちみたるさ見んやと語　もまだまたふかき心のみちを本のこの宿
侍のひやうく
うちなめくさうひやすくはゞくおもやうせんとも見えざるぬつきあり

てなやみし給へるやとしろうこれくあすさまうく侍きりく
中君の宿や蓬と心ともしたなれんとも思ひくやうりみ
宋なくありへひ侍へきうとや
見し蓬生の宿りはしそさぬしとおもふ所ありのまゝん
みく　蓬のこゝろえんさしは中君の見し語とや
いさゝかこれよりあるとおもひ心ありつけしと蓬とも語人も
中君よりも蓬とひやされけるや
さやうなるわざおほしくゆるぬ物を　蓬の宿やめし
よせあるは見ぬとや
いとうしろとたおほしとさての語り侍るやこの浮世山里は
てたちかはよりあくしてめしはつかにを語るへいふみそれを
きたはれんしさるうさ有くとそてとわらいつやは思給へるな
とのすゝておほしとまのかへしまをあれと

蕉の袖や中君の前とめしよせたりけれハ随分れやう
まの給へともそれハ宇治へかへさ給ハんとの族合九
なるや 藤花山里の事に辛労させん有まさまい尭
めしよせ給へとや 去なりなきれとも前へもまかし思給
へしとて中君とや 弁 中君まゐて蕉の袖の給へと
以前有しるもとうしら此事にの給ふとやきゝ
少人おもはしやすまふみもいかてかはつゝきの給ふらん
かねのつるや
とのうち絃たちめいてしたまはやうくゝるちかりける
むかしのこゑもあるをまきされたくて 蕉の沈さや
山の名絃くるをあふのあやめもかくしゆよいと忘めやうる
毎さ夜しててまゐらるも 夜のはさ山のすや
まうかりしとのこうちぬはおほさる 中君のんや

限りなくたかなる事と思ひやらにららきんしてやひ給へ思ふ
あつく給り 蕉のきんし給ふとや
宿しさの限ふふある世やではつゝきとまゐて雅の結び
よハ大君のこともいひつく下ハ中君れいと思へし
ととあしの里ままとめさほしさると
逆縄て喜娯さふあらん物の川の名いつ殊らん喜悲れ里
人喜も女梅まてむ安喜とありん乃中や下ゆき中
君れ事や
彼山里れまゐりにてゝ有とハ寿くとも
ろうとの給へり 宇治君
むかしかほ梅の人ふるもはくる絃みも出ちめてあこちひ
給ふんとあんさひ給へなるもにけるやの給へハ 大君を
本縁ゆもとあ家とれ蕉の人や 河
白氏文集日香炉

峯山ニ有寺号遺愛寺伴ノ寺ニ宗皇帝有子忽
薨ス不堪哀傷ニ建立堂舎ヲ王子ノ形ヲ安置ス其寺ニ草堂畫記
畫漢武帝初喪李夫人之甘泉殿ニ令写真丹青畫
出覚何益不言不笑愁殺君ヲ云々
彫刻ス漢武帝ハ李夫人ノ白ヲ作ル以温石ヲ云々

あらはれたる御絵のびすえうしてかしこき川ちうれうらち
をはんかうし我さひゆりてとわし皇御事
絹也おもてたち御絵のひとは寺なるをそへて大しをと　中君の
絵すもうつさんとのうすやみなし川ちうれうちまると
さきハ薫ハ大君のうすを昔おほゆる人かとの絵よ
よりて出くるや思ひおみなし御札御硯の時ハあかずとも
かのれ又益路をも絹きうし人の形をはくさまてわて
枝ほになるにやさきはた大君のかとはくらんとの絵へ

八ゆとゆらん川にまうし格絵らんやうに思ほゆ也ハうられ
をいとわしきやいつるや
河古
はしきしまみくしかしりかせし御枝神ハうをほと旋てけられ
むかし御絵ある人かうものをとめるにはさそてみをうし川ハ
やしと思ひ身まてはしそうれうゐとあれうひ
弄
かしそえうり絵るいとわし御かの絵也云々
灯寺同　画やしつほり枝をも人清うしぬるうなれし
わうさいひすみおもぬんや云々
こうまもとめるをしをてあたうしろあたくそ絵やとの絵
ゐまし　さハとろうしにも鏡子とも絵師あり出の州に
をとあくさめんあめにたおと一人はんちんとまうちに画絵
師まミ千人の中にうちあしかぐんとつうさんとう
清さも絵よ右絵師は全をとはうしてうすやうにさ

前句ハ王昭君ハ美人なるかゆへに和よ及ひ沙汰して
おきせしに絵師あしくかきなして王昭君を胡国
まつりかはさるゝやそれ大君を薫の絵すかたにかゝせんとの給
へる人今をはかりの給ふにも美人姿をもはかなくやつく
むとよしろかたちをもとれ中君の詞なるへし
そよ誰れやくことをもいひそめしは心あはれなるへき旦
さあらんたまへよ　薫乃同心の詞や大君のうちら
とひらかなしもんはさりまてハえうつしきこえし
の薫乃詞や
ちるき世ま花もなせたるあくことを待かるとさやかあらんへ
むかれへともれとさ海ちうちきみ見まんとなれたるを
あけさう絵々しきれむかうきたるも　変化や
むえ恵云能縁近ハ母のうれしく志け氣女とおもふらん

とはくるまたりなれん前句も色ありしを紅ハ福ありと
ほのかにいひある事やさう或說り能縁近ハもつるを
さとにもと帝しもとありやうくときまは薫乃能縁近を
ふて大君れうら紙はくしせたるとれよりひきせを
いとわりてとふくらくらくまつりて　中君の
心也をとりまる縁也
人きれはいてにいとあやしきとよう事しなきことそ
思ひて待れとの絵をひかさしきありしきとも
中君れ詞也とひよう事しれとも薫もひとつの絵ま
しきまとも見ハ手習れ君のうちや
いとう絵しきあるれあく　薫の心也
行ちけにかとりまくに几帳のもとよりてとうしかれそいと
心細さく思ふらし絵まと　薫乃詞や

いかさ侍りてかく御心をやめておもふうたにあらんとこへし
中将の心也　手習れるをとかく出たるはあらるさへるに
をやめむとの御也
いちかれ人の思ひんとのあはれなくて侍りきなくまてはな
し給へり　　かねうるりをいへり
年はを世にやあくんとも志はしきつる人のは底はらぬ
きあまりもなのして為なたりしを　中将の親也是は
中将母は服かりれ手習の是のるまやなるまし墓此
は帝陸よりふて為出てるやも母は陸ちり妻ま此
てくるものとの争ある此へし為出るとなり手習
中将を争る也
うとくて思ましされ也
又うは侍まに侍しを物ふりはむかひたるんと思給しを　中将此見背あれたる也

やかてへ見背あしくとのいひけれの心也　　左比也と字
さいの所ろ来りしてそおやしきまて
是中将人やさるとしくも
むかし人の御事をいひけりかのひたりしくへ哀りおほくすりに
しあ　手習是大是まよく御給とも
くるこなとうお侍しの給ある中く行ゑのをあさまし
きりてあまれたりとも あん見るへくとのいひえへしと
着の家を大是御われも形見んとの給へてともさうしぬ
へくあまくはさても物いぬよしとの給手習是ち御へる事
の給うんためや
いとさしもあるまし我人の心そうは侍え我ろんとの給と
手習是人は服かりあれ共まりは御給まりしきるにあり
にはく御る御との心よ中将これ親也

三ゝるまかくまてこそ　他人なとも知らしんすはゆり
しきはまして光君にておはれは三ゝと薫の字給ともや
さる人きゆへ何事はしそよてさやうなもとひてひゆのしらうなるあ
るとうもとかくもうとめさまを給はらんとの給へるを
薫の詞也
いさやそのゆへをいつきりきんこともこゝられ侍しを
中納言の詞也　手習君の事なとわさとおほめきて見
給ひもとしきりしやうにの給也
物きこえさせ侍たうえさせ行ちとまりさはりゐんともと
らんせのとうしろめたくにおほしたつかなきともとたのむ
とりうさおはかて思しまし給うに　中納言の詞也又
宮の心は大君中納言に気よとくましたてさせ給はん
とおもひとをくさ給うをと大君はうせ給へ又気ひさ見

こうおけ見くきんことあるしと給ふとや
又おほかたなる事ときこえうち出てくんもさてはまさんこそと
侍とおほしうる人なれとの給ふまつしきなるに
宮のまやいとおほしたるへきさまは又女君もりとくの心　手習君
てきんことをとこう
宮の思ひく物るとの給ひへんくの　薫の心也又女君の
思ひてたく女もたかるらし人の腹にまよきたる人と
推量し給也
思ふ事はさまよたりあるぬへしともしらぬ
又女君の思ふ事しれるにはりりて出来たるまそとれ心也
薫の心
引歌 しるひよくめさるれたのみなくりせハ何まは思ふ事のつましし
むかしの落胤腹の女とこそや

みるよしもの給ゆかりにかくとまりて　蓬莱山也
かりそめにわかれしをいひなしてさもあらずとおもひなり
くるしき行へと　蓬莱の洞也かの給よりしてはるかにとの
るゝに遠くなりきて行へとみすともあるまじくて行と也
さもなくにおもひつゝてらるゝ海のなかもなき給へは
中君のかんも
あはれとおほしめしけるにかなしきやうなるものいろかれと
かりそめにえくしるしとや　中君の洞也と詔勅也
又あまりの心おもひとしてたゞへきことにさんとの給へは
常陸せんしるをいふかんの給ひたまひしとれ中君也
給はらひや
せとうちの中あむのありし事かはんの所さてもとむつをゆ
先ハ其ほかに方士ら揚妻妃を尋し時上碧落下黄
泉まで尋たるらしからゆく蓬莱とも大真の行衛をも
知まじかほ行て海中へも尋つきんとせんとうり
又旁求四虚上下東極大海跨蓬壺見最高仙山
上多楼闕西廂下有洞戸東嚮闔其門署曰玉妃太
真院　長恨歌傳　陳鴻
ちまてきこわりへきよはおしさあれとかくなくさめん
とさあれとも思ひしまし　しを詔也ときさて海の
庭とおもん趣つるまゝをくはあけましもあまりんのなく
さめんとさしたとひおもしやかの端中君の大真とあらハ海中
とてもあはれとの蓬の洞也
人々の行くひとゝまたのまもなく山里れほんとんなも思ふつ
さらん行くめしにの給をもまたとつきにせめやすきを
大真の木像をさくはくらんとみえて行くしよ相をみると

宇治の山寺に年たる女ちゝをたつねん　浮舟ハ本尊に
ハまうさんとの心をさして　薫のかゝる成へし
いさや此あたり人のはゆゆしもなつかしとやゝくとましし字
ゆかしといふちかくれと今くものたくこまとの給ふにいとおし
さたしはかりもなくて　中君の詞也　又かれハ浮
舟とハ家にかくれたまへとの給ハさりしかや
いとゞおほえ給はぬ年ころのおもかけ　中君の詞也　浮舟
常陸国より御供しけるもとにけり
ちくな人のうれりしさこそに云ひく
中君の心をたとへん
あかつきの月まちかねしを　浮舟の母ハ
本院とて中君に見ゆまかりたる也　浮舟の母とて八宮の
もし見れくもえいく一条の給しに　中君とも力及ハぬ

あひ給ひとのへん也
物まうでなどしつゝ見はのかたりしくハあやゆかしと思ひしかとよ
つほは　物まうで　浮舟にあひ給とのへんおもひおり
見くるしくもあまんせんへし　浮舟ハ形ハ殿よのへん也
これをいつき侍りてみかさん此たけ自然めかしに
浮舟と母の何とも姉ともいふとも
御あらんハいとおしかれさことおもひ給へハわろからめ
薫の詞なり山里のかほるとやせんや　薫の給ひしにつきて
侍さ八宮のとをからぬとかれ萬也
さまてもゆかしくもあるまじくと宮のゝ給
中宮は中君の詞也　物まうでとハおもひと
ゆかりをたつねていかさまへとゝかてかへりきさきなれと
あひ給へる也見るにはしかれとさすかに哀なり

薫のことや中君のこと案し給ふ也
あるましきこと、とかく思ふまゝのかう　中君のこと也薫
の下心にて行かましき給ふとも八おもかけしたちとゝかしたる
事ハえもてあさぬとや
まだうちとけぬなれたるさまはえもてなし給はぬも
あはれなるにや　頭注也
見しつらむ給ふにて我こそハ思ひとまふかさまよき色にてしか
まゆくとうちかはんかいとりくさひしくおほしまくうち
まもめて　中薫君のことや御給ひのつひとハ薫の君
つま給へるとや
入給ひの里居　中君薫はせめ行さを行て薫中へ
入給也
折とこそ君志とりたまふハえしくさしてはいとゝう疑ひしくへき

ちかしきたちにたえかめんことも見えぬ紀にして此のしかて
とも人ま給ふれもよろしけり思ふるれとも恥さへあきにおさく
うちしんもてなしたるとうらてかうたあもあいなくるへ
なれも給んしくへしてはしますもなけれはうちまでいそ給ひ
ぬ　薫中君よりへの給也
まくのことゝひくくものいひくもへかくんくおもとおもあるへきされ
かつふしえあかハ大人へくとの世母は我とむかし思ひそめけれはさ
もくにこつかんのさるふりさとをそへかくんなると　薫の論り
給てかん也
ねりちくとまんしあるんありぬくまや家たるあ人のさとめに
心もちもしさてとのなきたくありかしかくと
薫のんや女とかまんせぬとのこんや又人まてまほま
もふ弁とれ縁也　也　練ハ調練のこん也

終たりしの跡とふ人も　薫りんも手習見れるも
いてさへともやハ入人さ　薫のんもけ君の手習君
とん見り作るとその跡へもまとしくぬとる
又更存て中君ふ家下山路の聖んなみふやうに
作るゆとハの跡かなや
さそられさうしあれくそひまうんまかくいはうほとも
母ることのいやしきは心うへまうくもわらをとる
手習君う薫のいひより跡ゑんるんかうれ事ゑて々
なきとや
人の目ハ母もわしきをいうあさくう趣宿へ入れると作それ
たさ申は　大君母も終をわしくていふや
世も母うは　手習君母は薫れ同しろへとすら終つ也
宇治の宮をもさし良見路宿時ちいとくもりしらてとる

ともしてもうるふんほそ入れ九月廿ろ日ちりとりかえ
しちりいとくしうくをのをつきちうひくうろそくは
らまうしをなるかのやそとのくやとむかつくくへのもとうに
見しもてみるたへまゆかうらうしくわしふるそ陽る花鉢
の尼めしいそうれもちうしくちんにおとみむむの末丁さし
出くま都かり　寄　陽子なる人さもと
いとりこ入れとましていとわそろしあまはかれそつまし
うてあんとまやみはいそらは　矢尼羽や　薫り
末丁もしに尉南しなるされれ我や家をもくれあまに
つもにわそうしをなるとくうりてかうしけあ入れと
ゆはいふるやましていほや
いそてなうめ跡うんとかまひやるたにおわしんなる入とも多れ
物跡も字きんいてうんそうれるとはまる年月うれとて

一　薫の詞也

源氏をひとめみまてあつはるにおいへ人をいとくはしくまもるを
みるを　薫の目ハ一たひ源氏に心とまるや
人のうへみてあいかなく物をおほせめりしはかうそら物うしと
思ひ出るにいけともえくらぬ心のみも　弁尼詞也是ち
中君ハ白き女のかれくかなるを　と大君の歌結也
秋の比此方さそうしゆくかるんや人のうへとハ中君乃うへ
みて大君乃歌しるや
秋の風かみしえてはらを思ひしゆりて　此句を此て
ろこもまた源りや
秋はいかれる風の音なれハ色よ志きて見えしうもらん
袖そて色変てらるもハあしねとも物の名をそあやしかり
きよろの花けりを語めりしを志るそせ中此世有様とか

のたまひけ給ふるもちはさくまなんとやすかまほ　弁尼の
詞也白き女大君まかせて給ふ故中君の結語ふ中にうり
ゆかる事色々源氏とも
なくさめれハなくさむるやうもあるを　薫の詞也
事とあり　大君のこゝろ給し
あらましなくおほしたるんしてあやまちれやうも
給りけれ　大君の中君を白き女のうちくるる事
とふひきてなく御給ハ薫のおやまちとも君をハ源中
たとし給りまうさてうれしとや
此比の有様ハなんにうそきこみよのつね　なれはまとし
ろかさまにもみえしやすしさめやき　薫乃詞也白き女と中
君との見れるや大君へたいかうひ給へとも色それハせよ此
をのなくひとやされは中君をとてさめ給りんやきを

見えし給はぬとや
いひ出てもくもりなしおもふのかゝりぬる煙のうへこそよそにまとも
のうきぬるすゑのうへとくれさえ年のはに行てはてにひさしう
きゝてこそ又なき給ぬ　薫乃詞也大君乃煙よりのち
つゐし事や消しものうきぬるすゑのうへとくれさきたれ
そゝのかしきとや
はかなさにめして過にし忌日乃経仏の事あるとの給ひさしてこそ
りうきゝくことのあるにつけても　大君の一周忌なる
あり　弁　姉君の中の三回乃法すこそ　私一周忌也こそ
くひなれしとのやまとうちは松をはるうらとやくなきさと
大君のおほの事と薫の詞也
この君んてんうつちて此山寺の御さうしにそうちてそ
とさむしろをおれし身へきもしめてんとの給くたり

こけ袖ことも数ならぬなとかる人きこえとくとも
宇治乃宮なるや
かきりての給るとせき坊給と　堂乃外廊僧坊経
又なと出家給也
いとかうこれなくしやつしそてもて　阿闍梨乃詞也
むかし人のゆへある涛をさなるふるさめはくゝきも給ふんとこ
ろをもおもほしなんおとをなくれやうなれと　薫の詞也
八宮風流りはくゝきなし給へりとなり
そのかきしもくとくれかすみはをとこぬ人をおほしうんと
父宮も寺に名残ゆかしすくし給しぬさし前とも
とまり給ひんてお住しやりてんさいとまて給ふ八ゆりある
まや　姉君達のとまりき給へんも父宮へすみはもえん経
いさゝかし世とや

今ハ見る人もなくてあれまさりてはつべきなれ　中君の
宇治のあたりハ忘れ給はん所との事也
故宮の御ありさまもひとつ所になりにたまはれんとする
ら寺になさん事ハ心せんかたなるべし　白宮も給ひし給へ
くゆるかたにやと　中君の打しほたれ給ふも
心はさるものにて御さいそくもあまりに川づら近く
薫のかくすみたまひし寺にはえしもあらじとや白宮の御所
ともいひはべるなれとや
をさうかたもあまたは　御つくりなくはかなき所なれどや
なぞえんてんとしなりひくなとしかたもはくらくくんの
心えてかん也の給へも　也とハ寺となして又おり
寝殿とハ立給はんとや　以上薫の詞也
ときの御しつらひとものしうくたうとき清ん也

地の詞也　阿闍梨の心詞ありおもしろき也
若打過にけりて今日をはしたてあまされむしくひ
まうけ給ひし御経のほかをくろんうなへれなんの
あかるをとりて　河或侍記云　親旨難至周位乃時人の所
ておりしましあるべく絶世の年ともなくろされなきハそれ
おやうの事を須まうけてはあり給ひまへけるや　経文
まあるさると
さしつまれみちなかと入侍まなかこの五ん殿を清給へさるなり
はけしく　仏居をそえて御手をとらり
清かうかれおりしまさるらん
また君れみにほんのうくく御堂白錦とれん也
ひとへりたいくしな事也又後のつまれをしめさもなるべき
ことに侍りけりを以て其れつくりさるべし　たいくしさ

一 暦 かなはじまりしこと

このこよみのもちゐられそめて侍らん日をたづねて物の本
にみえけん　暦博士　推古天皇十二年甲子正月戊午始

用暦日く

それより二三人と代々かはりてさだまれる事ともさ
堂塔などもやうやう出来て大工を倍付られしとも
むかしの侍どものまへにはつかうまつりもせざりしとや
此上河原家の祠もいまはいにしへの由緒式有べし
せうとの後ひたちさめて参らするに人をもめして此頃さへ
ともにはなれたりけるまへにまゐりて事とも御用を仰らる
まく茶のまはそのかたちよりゝて給ひぬ　薫と河園
和泉と漢合し其後くもとより
このたびかくて其後に御用して立めぐりて見侍べし

紀をみるに此寺にまうでてみれば尾花の何となく仏前の
このありさまをとりあへずにはあらんとおもふにつけてもまづ
らんせう見給

また此寺のことをはるかに　薫乃みや寝殿をたちいで給ふあされ

このまへてんかうへくはしく見へきやうありてはべりていそぎてと
まゐれとて物して給へ　薫の弟尼上の祠やおはしまして

またてんをはじめ給はんとや

京の寺よりもとめ給ふ人々を物かたりにてもしれきこゆるはひと
めしてあはれなるかなよろこびて給ふとぞまゐりてさらに思ひけるを
とゞめてひ給

乃侍従の人たちなどめしよせて集りて参らせ上の薫祠や

中宮の前にまゐりて人を物たちとあはれ薫

此祠などもむかしより

ほのかなるつくりてもとゝはさもちぬかちん人とさしるとみられ給

あはれともおもはぬとよめるをもちてふせてむかし物語なるとせ
させ給
業平の歌をみて八年ある時にちかひまゐらせまし
されとも兼ハ大君ののちも有常のむすめと子なきとれあ
りきてかへし給ふとや
在大納言の息有經をむすめにすくりん申まゐらせてことに
まゐらせ給ひ
いさゝかとありかへし給ひとに　有常の事なるとや
有常の限りの時のことや
めかしきをかりまゐらせん息有經をいふかしき物をおもひ
あやしきを給ひめかしく思ひきなとれとて給へ出て申に
業平の生れ給ひしを紙有常のむすめにゆかりの給ひし
事かなるや
かくおひうをゆるぬ世のなさけありて見まゐらせ給ふらんつれは
世ありおもかしをはからまつりともさしきるしれとのいかに

給ひあるかたまちかくをもかれし身をもおもひかれ給ふらむき
命ハかとおもくとおほくのみすとみ給へまかくしぞ思ひ給へあり
給ふなん　兼尼か後世のまたに業のあれかくしとは並
有常ありもまたかなしとのゑるしきや後はさとも有
末の世ともはの時の事給ひてり
いとかなしきを心うく給ふ　兼尼あいさして在大
夫ハりわくをしたるをもいふかしきとや
宮よりさも時くまて来りて見参らせむかしいれくたへこをも
つたへてぬるはさまれ思ひやりてあるたなありけるとの給ふ
をも給ふかく給ひ逢ひてゆかしく思はんかしあさましくあらは
うちはかなまいらせさんをもたくありて給ふなとせまや
中将よりをも兼尼ありきれとの給へたまふ事ハとかく
しきりてまゐらせぬとや

この姫君乃御ありさまきこえさせては年比乃御有様語るとかき
つゝく　大君かくれ給ふを弁尼かなしむ也
何のわか何事の給ふも御気色もとかくまきれたるまゝに
給ひしことかなしうおほえ給ふを我はいとゝかきくらしたる心ちしてまさりたれ
也　大君乃おほえたまひて声なと忍ひすくしつゝは
我のみあまりなるよしや也
こゝろしらぬ人はおもひもかけぬ給ふ　花　こゝろしらぬ人の心
むすひのこしたるかたみに人すてられてかなしき
心あもしらすつれと
わかしかりけむ人のうへにまたもきのとかくさきゆ給
大君乃ことを弁尼かたるを薫心のうちにてのたま也
宮の御ためによこしとものことなかれは給ふか
中君乃御事と薫の心ちもさまもかなしうさへとや

心ゆるされん人のとゝめおきてあるましき事なれはまかせ給ひ
てくうそれ給ふかゆるを　是も中君乃事薫の心也
陽心し給人なとみは弁をのみたのむへき人とも也
弁　うとき人なとはさもこそあらめとも思ふへき心
物いひ也
あまはいとゝかなしさまさりてつきしなのみそてもかくし
てんとも思ひ給へは進みなとはゝかりて　中君乃薫
ありて情しう見えてさりけるの心にもなけれはてたした
さいはひもなくとうまてあり給也
ありひしらん給　大君と中君とを薫の見もて給とや
わてものとはいてにはかにもつかしうかひこそ給へり
薫乃御とゝ君ことの給ひ也
京に出る給ふんとはこれつとゆくに人乃はにやまさけ給

なましゐなれまちあるに　弁尼詞也
あさ乃まくら深山をとをし給ひ作者のうへなれは給へ
心あるひとらくつとけなき中将乃君とてさふらひ第給
ふらう此人なるをともしきへわうさう侍るにいとあひ
てられさほとに他の給もうるととしくも侍るをなりを
あり女子をとなんうるて侍りけるに　手想云の中
ましとかゝるや
さまやわらんにおほえさ比者なるかくに　文選のす
とかくるや
あひたくまつりしを掲しさやうにおほしありてまさ
とも此くんしいあくてもあらりけると　文立乃中
将の君手想云とをまうさて侍つつさ給ハ侍りし也
侍ひなく掲れてとにおほしあるとてやうてたへさ給しつとあり

あらせ給ふなる紙　手想云是れ侍り文立乃あると
給く此山里ろ侍給てかしつとに如給と也
そしあなくとろくえ侍つくさに如ふ侍るの
文乃まりつさ侍を如ふまうすとまうりいつるとや　中将の心ふ
みられくにのとのめふたりあめりけり紙ひとくせのりて
手想云是れ母陸奥守比事ま如く下しとや
その君たちつくるに掲し給よし此かなると母も侍のめうしやれ
つとなるふさらし給ひつまて店くふうかせて掲こ有つまて
まめもわくもやその給つをもおちそれそうひなくてまを
んあけさ侍あ給　手想云そくさいまましまは
よしと文立り母の中将中せとも新給をぬよしの給ひ
ちあけとや
さて文をさらにありてくるをと給ふけあり此年は書あも

常の好ハ法のつゐろ心まゐのあつて　陸奥まくら又常陸

ねり如く下也

彼文母は義事りたり香る也なんほの久ハ堂絵し

手習君乃中君と義く事絵也

彼君乃年ハちくちかつるとみは如絵ゐかんりしいと見し　手習み年ハちく

見むひ出絵すりめすのしさ本すとこそ

ちまろのとなかんとも

本まつ法きを文よ法人のさは津くきて結めりしつ也常の

手習君乃母中義人文すてやと也を見とゐ上年尼の祠也

くりし見し堂文わきしめ絵事母さしし鐵ゐてもわかんりし兄

ちやとゐつかんゐてきぬ　蕉乃んや

むりし乃法事りひりつきてもかれ母し也人をまつ如國まて

を義まつき同し者文んあるを　蕉乃祠也大君乃ゆ

くりこともゆくしくまつ絵ん也

く絵ま人絵ハ法りられもちりまへ入りこ絵ハおまれわさ堂ハ

本くとこと心つとまつさにをやおつり如りかんつりてり

又堂の法まれ流してま手習君をとハし絵の後とも何ま成

母も中君よハちりれ人の本きおくめとれ蕉乃祠也

かくまんゐひし也津く人絵へあをとこくりの絵をく

蕉乃祠也わさ堂法あつくとも義ま手習君乃絵家也と

云と母より津つてよ弁くされとや

母君ある故小まれ法めい也弁とをれまぬ事くしひよ侍るへき

とまりこ法同しくにをくこくるり見こと乃絵へまれさりき

浮舟の母ハ八宮乃小君のためまはめい也弁尼ハ小君れ

分めまるいとこ也法まれ小まれ弁尼乃ためすこいとと

めいりられ母氏母あるるへし

さい河ころ京より大輔のもとへおこせたりしハ
中宮の御文や　弁うさ　よろつのことハ女房や
かのまきちらしてこれはさらにきこえさせむとの給ひけるさ
為則きよきなと給ひしもきこえさせんとてたてまつれ
給ひけり　　　自然その文まての心よりけにきこえてまつりし大
輔のもとへおこせし弁尼のもとへつかはしける也
ときこにさやうのはへてよろつ御心ゆるさゆゑ給へんとおもふ
あきぬ通はかり給ひんとて　　　自然大輔きこえしん
時薫の給ひし事とは大弁さんと弁尼や
よろこひとて京れるさぬやうにあるとやうの御おとつれと
くらき給ふ御あはれにも給ふ法師の尼君の下きよき
のまつりにとてぬのあるといふものとさへかしてきこ
薫より給ひてまつりし事也

人のきたるよしのなかれたるよし御まゐりなれ
ものゝあはれとおもひやるにあはれなる
る木のくれ西へうつりてあはれなりしたる跡のことを
思ひなからうつろひたる御気色とおもひける跡も見ん
こゝろとも見はてゝあはれにきこえて給へは　　弁尼の事
いとくしきあるに山里りやとりたるはなれとてまつる跡
のまた御　　　面白のまつりつる木や
あるにあらむとはいひとも給へく
人のかなりし一筋にくにとふる虫ありまうしやとふるゝ
蓮かまつれたるものゝあはれにてあはれ御気色ともさき給ふと
や給ひしふとへ蓮の御心ゆかしやとて可憐虫のうち
　何　木蛸蓮のあらしやともかにけふる虫のなれや木蛸と
　卒
蓮の影や一段文云ありつきたる虫のかれ影とも

ゑらへとおもはゝてしるさ給ふ

蜩（竹詰切班身小虫也）本蜩玉篇ニ

やんやうも

中天へ蕉の葉かゝる

やとりきやとひ出給ふ木の下の残暑をいとふさまかゝる雨

蕉の葉と給ふとこそやとりつきたる所なれハとの残暑をいとふ

の心もてなしくるれとの心也又弁尼とやらん木曽路かや

やひとつさこち給ひてさやかなる所なるへし

あるとこそろくち木のもとに弁やとりなとゝひとさけるかきあつさ

弁尼やとりへこ所とてころ世を定かはおれとも也さるへく

ふ所さハやとりて木のもとにあるとれ我也木とあのとて

ろうにあるさ殿のかれしなとも

あくまてふるめくるれとゆへなくもあはれとてつきける

ならさめかはおもはしあるゑめりもみらかれ給へ

中天へ蕉の梢にかゝる雲と成る雲也

おもしろくあれなりしましくるゝ給ふなりけるも

まはれ給ひ給ふとも

白妙の衣はし

南の空よりてさやてかすかにもかなしくまてきりかゝる紙女君

進んのむつかしきことも世をいとふくゝる袖をやとりかる

もさんやう

蕉ハ三条院のおりしまをちや女三宮

のおりしまは給ふ空をさは戸ぬれへし

宮柱しなはなしの作と

白妙の衣也

冬ころもその給ふくめしよまをて乃給

ふる蕉を給ふむかしも

白妙乃山さ

歩く文母は日比するふとよおりしまはれん山里の梅し給て

蕉ふりて又云也

つとくる衣れ給ふありさまにひ給ふつる内猫給色

右
鳰のうみ霞の外の春もなほ見はてぬ夢の世中はなほさ
らにつきせぬ心ありけん事をたのしみにいひておもひとり
いひつけたりき　　　　　　慈鎮和尚の御歌也
はるかにみてしかは涼しく浦とも申しつめ給ふ
夕日のさしかゝるにも中
の霞をも春とおもひ（て）　　　　定家
てるとの文言也
よしや浦なくさむ名のみの文はありまし
やの船とも　　　　　　白妙の詞也
あはれに衣もかへてけむ　慈円
まくらしはしたゝみやなれつゝ
女房の花のなれゆく　　　華の地の詞也
とりあへぬとをふして　　中院の詞也

さはれとも（ふしき）との縁也
うちえんして思ふに涼にあれのなくならひつ
たくおもふ　　白妙のうらに鶴すみてとのめをも中
えのくとも白浜也
かならずかけてやらぬ人やとてほのなみもさそひ
おほかたの白妙の詞也
比詞くらくにあはれ　　浦まつて也
かくれても山かけのふもとかくれて
山里の如ありきのうち　中院の文言也
かくはまたさやかにうちすてゝかくらくうつしと
寺のつきあはれ　　　海の月とも
雑の文かれ宮かへりもつくりしたつまかく

思ひの外にもさくへなちりみなさもとへつれつるゝな
らはなんとゆきの猶あかくてさるもとする出むつのはるかゝりと
古 にかなしき我もれちよはさかへは世あれはすの世のしこゝろへ
此門右ともにゆき中充も一家世紙のうきんとも猶へ
から雨さらに光りの中もとかんよりさは千ちさとあり
しはりてたへはみなは紙猶かんの人や去年から
なるもの猶ちんさむ可紙との義也 并ことなる
光はの中義んよりは字治の家まてとまうくれと也
こゝ猶わかくわる法んにさらはよれるゝもくとあはさり
白衣の中君のうつ紙と猶也
やもとゆぬ奴へし　白衣の猶こゝ猶也
これくたるせんさんの紙人におもの猶よりてもにてさ
さし出てまうくかくしくみゆるに　[illegible]

よりまもとく出ててらん也
古 秋の野の花の花の紋の花落はす出てまうの色神とみゆらん
まさかのみにてさしゆうも霧ともしぬるもむらきれとえ
さるもたちなもさたちさと紙れすまれとうくせるを
衰なるとし　霧をはしぬるもむら玉乃を
此詞中ふも雨白と云り
あに出ぬ梢とかし志のさく紙まうの色彼乃霧あかくして
白衣の心と薫と下ての中君れんへと寒しく
績猶や雨は落れるや下は中充出ひく薫ゆへり
梢とり紙し猶るのや薫をもまま猶さ猶紋の露し
あまりと云り　并　志の落読ありあのとくさへはり
出ぬ梢やうく又云出ふ落やうへさ半中まさ出ぬを云
とうく義の我同中充の下に梢やひ猶とえんし

誰も薫君のやうにやと
なつかしき匂ひの御移り香もなにとなくよそにおもふまじき物にては
巴など包ませ給へりしかはしきてみかきあそはせ給ひしと
哀なりしことなとし給へる 白菊の花をや
女君も心よせ給へる事なとおほえしもえてなと
たゝ 中君も琵琶ハさらに給とや
ちいさき木丁ひきよせてほのかにまひ給へるにやとおほえてその
うちとけたるつまはしと見えけるとあらはしきや
弁
中君や懐姫の御方やと
秋の夜のあはれさのゑしきもの露をうちのあはれまさりてしる趣
中君の心さへ白菊の花のもてなしたまへるつかさを給はれ
こと葉などほのめかし給まてよりあるやうにや
わか身ひとつのとてなかきこゝろ菊はさらにかふうへし

ゆかしきはあかつきとまちしつりておのれほのかのうしろもうらうらく
たゞされなかなかひとつの名にもかへてこそ給へると思ふ所
さしとゞめられしと 白菊の心や秋ふかくてとうとう給
と給ふや
うつりかはる人もえあひなかにさめれとうらうらしきさう
あたらしくてうつろひかさなりて 夕霧は中君
可然ほとなれとも薫もえあひ給はてねとや
菊のまさりてうつろひたれと 弁 霜花のさかりの時なれは
おもへしかまさりしはゝさまにあるのひやかなる事
ねへしとの横しきたなあはれを思ふと
わさとほくろひたてゝさを給へるは中々よそにかはりゆく
一もとのあはれなと見るにつけてうつろひたる
してうつろふを給へるやうなきぞかれ義也
奇也

花 あらにまうをあつまりくハたくて然かめゆひあらし
てはくるもなきも源花さいを挑く咲やとく
いくぬ一もとにかあらん　花　花のうゝるゑハ中君れす
りさひよ挑へらるや
それをておもかを給て　ま中ふ色をくれたるをわとや
花乃中にひらく人ふともし行て
朗詠 不是花中偏愛菊此花開後更無花　元稹
なふらみとみえのこみ花めてたるゆへそう　是ハ晩琳天
皇乃清子西宮左大臣乃るまや此左箇をとめて給まある
時庭上まをいてゆるく化しておさなき皃まこの詩を
誦したるやらり是ハいあし人へ左府よ琵琶をとく
あるらへの化してい人る中にひ待るをまゐらせとハ廉承
武といつりまえ也 并 西宮左府ゆるまたなもしねと御

子なれえみくやぞるぬへし
西宮左大臣庭前霊物降居樹上詠前極小児詠此詩
教作者之本意尽字兼請琵琶授秘手曲小児醒了
廉承武霊也　授上元石上流泉曲
いあしへ天人のうきりまてかそみてゆとしへあらは　是とる
孫覚乃物縁りある事也天人のさらりまてかそとく
しへたるのあり二ツ乃古るをとりあるをそ家まさ
名やさ徳皆白氏乃人羽ぬへし　花　天人ひそかなし
ふろるハ孫覚乃物縁あも色ありとく孫覚乃中尾とうり
とく 并 孫覚の物語まあり廉せらぬり是乃るすとく
何るをも浅くぬらる無きまそのうしやとて
古こうり来世れおとるをたるとれ秘や是ハ白氏羽也白氏琵琶
を弾のし給へとも撥乃まふ奇特をもなけれは天人へも

くらきましきとてひきさしつる給ふ也
清搔とうしまた給ふと　花宴には琵琶を清琴といふ絃
の數をはらはぬ事といふ也　弄　同く
にほしとおほして　中君の詞也
心ある事おもしろくもはけしめかしうたゑつゝ人あるんなるへきさへつれはそて
うけしもやそておもなりれさくまたことをゆかしきたおほし
たまへ八　中君の詞也人の心とそ落まうハ清くきも琵
琶のよハさしもかうし物とと白君ハ引給と也
ふれとのん也
さいひとうもちとを渡りくしきにさしやう人へし給へり
とそへめしてさうれ渡しと死うきて思ひをなり給へと
白君の詞也独明とれるゝ也
もりしてまの姫くも物し給しきうくしちとひきもとあ

も姫よし物ともけしきましもみくてともみれ給へりこそ
又君大君ハ何とて引るれと琴ハよみれとも早下也
めてうもれうもをてて給へうしそ心うなれ　白君ハ詞也
さはみうつるをハまさいとかくく人へさ須とかもあらねとさ
なりあるうあるとをもくさハしそハおさよくく女ちや
ちうくにもうくしきあんすれるゝ也こう聖
六君乃るかとの給也
それ中納言をも渡るむめなかしう　薫もさやうにそ
ゆうれしとの給也
冬君ふたくさうくも得くし給うしちうれさ清中なみれハ
あさまめやうにうしみうまてそうるけさてもうし
ちうく給　冬君　薫のうや又ほ母の中君ハ陰乞
たまく清ねとゐると引給ハんと白君ハ給さま詞也

ねかひたりけれハえんしさてうにうつさあるを語さ合せ
なきと清さんとやわらしきにほの色
てうれうさあるも勢やよりあるも　新琵琶さうしき
いせのうたうたひ行は元のあそてわかしきは　白氏
うたひ行や催馬楽のうたひ物也　花　伊勢海ハ律の
之や盤渉調も律也平調に汲へかしもとめかりや
郢曲の家に為ぬへしとそ
いせ乃海乃清き文なれさ風かりひとよなかりきやつまん貝や　ひろゐん　むやひろひんイ
女とらぬのうたはちらつき乗りて遊ころあるも
古謡きこゆるとや
二心あるしきは清らかれとそ見えてとりあれも
白氏の六晃ものへ語るとや
支那家あるへとはさんそひんとしそやさあくの調子

桜にましくひ語へ色をあらさらし　中ころのうたも
みきし清乃清きをきるとよ　宇治れるをとらくり
又うたりあさ清しきにおかし家の語ハもと語しそいとおく
うかれるをたくひよ之へも　中ころの白氏の二人と
桜てやと色とれも宇治へさしんやの語るをと云り
かりれへくるあかうまや为とせらをはとくもとしは
なりなとして三四月ころまておかりて清きれつこあとこ
とつき語るを　古謡をとあへのせいもるやは順に
上古謡集れ羽如へし
彼岸母はしめし色を朝けて　六君くされるとや
おもしろ内より色とりて語あるまうにうに乗り語へ色と八家と
ちよしきをあるさ面して本すかしよやまふつまそやくよしとも
つりけへと　夕霧禁中れくるさに二条院へかよう語也

あやしく又さらに給ふてよいめし給　寝覚乃うや
白露むすびかへしまうとも又や只今ハ中宮のゝさ給
対り給ひつゝましや
さとなり給ふ中なにゆゑと思ふこの院をと見ゆく給ひしくなり
御事も表すゝ我なりと　夕霧れ頭やおハさひく給
院へまゐり給ふに心比まうとくしさのみや
むかし此御物語ともをとうつしかくし給ひて　源氏のうへ上れ
おもしまし時の事也
やゝてまゐつるも出し給ひて心く給ふ御子ともの度つらねぬ
上達ア度人々もいとおほく出さ侍く給ふるにさ
おひろちうなさと見ゆる也　白露と夕霧同じく給ひて
六条院へまゐり給也
おもふへくもおほぬそらんいとうらあるへくの我ふきて

見なれてさもこそうらにおもしあるゆへられさちうい
達也なくまゝく乃りおくこさよ宮におもしろくも物語る
ともに御給へことも見なるもきゝおおめてあやなりうとあり
六条院ハ及りとの中宮のんや
又さなるのをやんことなけるる御さ度みへくわさとむくへり
奏り給へるまそふくられ　夕霧れ暦との神まで白露
れ御もろひりしわさるを給ふ御合ぬとの御也
風をきをみの世中やるとうらなるけくともみへし
しきりさとのんや　ゆ給く
御とうらくもさうくる所を出るまゝてしめられ花やかなる御
あらしひとま立まし西へ今もわしもそみすられるあれお伺と
とゝいかよく人に何をそられて　中宮の君九宮御よりれるとそう
なん中もくこゝ又なるんのこゝ我めやまとうし光るとお給し

語　中君宮にわたり給ふとの心也
ちかくて年も暮ぬ　釈　二年はまちかく暮ぬ也
正月はかりより　釈　薫廿五歳の正月也早蕨巻に
年かはりて　次の年になる也と
御なやみさましたる事を語と　中君懐妊去年五月
よりなれは當年二月まて語へき也
宮もいと御心くるしうらなくいかならんとおほしなけき
て御修法なと所々にてあまたせさせ給ふ又々
あらへき御語りといひこゝろはれ給へきと　白文はつゝしめ
しめ給ふなるや
后の宮よりも御とふらひあり　白文の母后明石中宮也
かくて三とせになりぬる也　中君は白文の御方に語りて
なりぬ二年になるや

ひとつ院のきさきしるしおろかならね　白文は中君を
大切し給ふ也
大かたの世の人もかしこまりさはかし給へる
と　世上の人々中君を傍てはよのん也
これかれといひこのかたのさまをおもふさて御
とかくひとも中君を給け故　中君懐妊と語りたまひて
いつくにもおとろかすまとゝいふ心也
中納言は君を白文の御ことにおもふ給ひてなん
世をまとさてんかくれ心くるしうおもはさるれと
中納言　薫の心也
限あるはかるつひらかうしきあるへき　有人さやうの事と
ふるゝをもいとうしき語也
なまうとくてありて思てて法のりちとそせさせ

せ語なる　ゑまひして行てとふの詞也
是は女二乃宮の御意をさたし　此ころよまりて世にはなれたる
いとなまめかしき御ありさまのこと　と云是女二宮也くれ
藤壺乃女御をやうくれ給ふ也　薫まての給おきてを給也
内々の御心はさりかたう　やうかたれはいまそほかるゝ
こまかくも大かたにめてたきありさま　母藤壺女御
しきさねゆへ也
女御の志をふかく行ひける此うちになく
薫乃用意をと母女御の志をとき給也　大君ハ薫
はくも不　食館乃かさしをとる衣也　紙細工なとまて也
内々人さまもうるさくなきよろしくにつかまつるまても
いと限りなし　文彩也　此のうへの給付て用之
ら要なる也

やうその経り条りそめ給へさやうに有るれと
　是是乃情のそ月やうて薫乃給ふ人々是れ縁也
　薫の色条そめ給へる也
男のうちもんほのひし給ひける也れと　薫の思ひひし給也
是ハのちなれハゐれこほとめ付かせもいて　藤の女御
　りもくを給ふぬるに是乃うちなれも給とふうさま按女
　二宮乃御やうもんなと也
此治るのこいとおしくみけ所二月乃渡のうちそろうり
　中君の産をさことゝれに薫ハ思ひ給ふも也　内る人とゐる
　羽乃始末宴してあるも也
まかし抱やうなに按大納言ありて大方なる給
川
　毛ゐ縣召司召乃事也　正月除目也
田舎より官をとらるゝ給ふも也　此時の院宣也

匂宮をもてはやす人〻二三十月以後をもてはやさるゝとある
よし也とそ也　薫を匂宮をとり以て以後権大納
言右大将かけて給ふと也
河　賭物（ナラシモノ）　縣召（アガタメシ）或（アルヒハ）京官除目（チモク）以後行饗（おイ）賭物ともいふ也
或除目以後出三月頃なとも有也先かた除目をはしめ
ふたとあまたに時あり出物也云々　除目の後なれとも
ふるやとく
左大臣との左右にておのしきりゝて給へる後にけりとよりて云々
す本とあり云給て　此右大臣ハ紅梅の子なりや左兵衛
ともおりし左大将まても人の辞しと給ふ所ハ薫の左大
将に給ふと也　并竹河巻のことくならは右大臣ハ
紅梅也不然とも此右大臣はとも可考云々
此家をもたり給へり　匂宮の給ふ人巻をのはしれは

薫君給ふ也
ひとりおもしろき人ハことなるにおもしろき給ふなれとも
やうそ家の給へり　中君懐姫の方をゆつりて匂宮二
条院にありしまゝ此折薫されハやうて匂宮おはします人にし条殿
便なきとさしてはひとぐ思ひとらぬによおとなしき給ふ
薫への礼事り匂宮はの給ふ細也懐姫の行幸はに便なりと
有くるくるとりしをれは薫とて一ね給へし
わさやうなる方ととしてなるさねなきにおとくさきるいきき
ほくろひ給そ　匂宮の給ひ給へし
おりてたゝれたりし給ふさぬともそうくにてと見えてたく
宮ともいかう人家給ふ此の主人と給ひし給ふ又主人おり
てあし給ひと大君の孫とハいふなり也　薫権大納言を給ふ
給ふ時の大君の孫也　むかし孫なるとにたてる人母をさる人匂

階よりおりさせて后宮摂籙乃儀式あるも也薫新大
納言乃母宮ハ二条院へ来り給ふ朱雀如へし給ふに白衣
二の宮ハ主表下襲にて后祥あるなりしさるに如く乱
やうそこよひはなさ乃人ハ行く給ふあるまし不にと侍りしなそ
まつ侍るをなやと給ふ人ハ上るなりてそ思ほし出てなひ給ふめる
薫大将ハ如給人ハ大将の下れ大まれくてに薫よりも禄
と給ふもあるしれ不りせさりしなり給ふと人白衣と
薫の行るし給不へ請し給へとも中ゝ先すやと給ふ行
なとそてなさ給ふ也陪膳り出給ふと思したりさ行りし八
六条院ありて薫し給ふ也行大将御任饗れなるなんと云ふ
ハ事ぞと請ひなる也初主なる先例一部なくと案大将御
任の時なりけるの中なお為下と請して大饗なる中行て禄
と給ふまり白衣ハのみをと饗不へ請しけるくに家

やと給ふなるなるをそて御陪膳しめしたまふとも也とく仮信き
有之略之 弁 大将のはかさとまに禄給不へ白衣とともに
給ふや大饗なるとあしまて河海抄ニ云花大将なる大饗
なあるへきしと宮ハ陪下也公卿ハ大将より上の人なれ
かく給ふと
大臣とのへし給ふまくにとて六条院なりてあん有なる
夕方れ大饗の例にて薫乃大将のつかされ禄と六条院
なそし給ふ也
されされてたちのむさちめ大饗り御し給ふあまるとさる
しさまそてあん侍らひ給ふ 大臣なるとれ大饗なるとも
ねとくねとの家也歴くやてなるるを給ふなをと云り
陪下れまてやいかにたるとくし請使をる給陪下とも云也
うかまくなるも也云てそ大将より上首乃云ハむしろ人給る

や叙王ハむかし大将の時さあらん事ありける白氏を
堀下此窺て語し中将も河海ニ叙王ある此例為
ぬへきよし志るさ給おやまきるるも堀下とかゝれし
さる志とをいふへくさて
此氏もとゆかり給て　前女ハ白氏を見えるを語ましき
やうに有しか六条院へまゐるを給と見えたり
志りん給はけ遣てまゐるさむとなるてぬ月山きよ御ゆかり給ひ給ふ代
白氏のゐも中宮奇やうに給へハしとなるてぬまたやく御給ふも
大ゆのく法るうにさいとなかめさまし中の給
さて八白氏の中宮を心よせ真給とて十分女もとある也　夕霧此つ
おもかくさもあるぬ法師とするをとあくとれお師しの花やう
さに御法しおかりてとしたらてまたまし給つる折うし
かくらしてその暁男子くまれ給るとあとのとく八お

ありてう給しく御後したり　中宮をハ六条の法をかれハ
夕霧女は御ゆるを給ましれへくも
大将殿をよろこひ給をつくしまして御法はを
私も宮をとむむやて中宮の産さかくとし給へハよ　薫の
ろくひ給よ給ふひを捨へてるや
よへおりしましなりしかしとまゐるにやくそ此ゆかりてひとう
ちさへ女御ちらあうし薫の給へり　白氏のまゐり給
しゆれと法る生給とに薫の気給とも
かくるもるとおりしまをハ薫の給ふ人すし　白氏二
条院に蔵の給るも
法るふやしおひ三日さまのおくみの法さくしてとふく
売り法るれ又くにし給る木れく例とハきり
五日の夜をた将殿よろこへしきあ千色をあてのせる

うんしきハ下の事に海花をなく　そこのせにとん
仙家の長命をたもちたる人をあそして碁をむつくハうくそう
王質かをのゝけ朽ちてせんにかたう故にめでたき碁のむかしの錢
の千畳と河海ニ見ゆ
まうそんるとのゝ碁のはしめのやうかく　碁乃けの二献を
と用さりるすや
こまうれ地まへのつくかさね二十ちとの行事むくかさねて
ほむつかさたまうそてうくしうを出ひやくにゆうく行へれ
や
木具へまゐめし札地まつ多くやよとつり
こ海へにみまれつわきとあ若女房へあへ季とたへしたる
庭すこれて殿舞なさや乃あや
宮乃ねまへ女をせんてれおしおたくけさことをふく女は
冬さうしせ行くり　白ゑめのうすや流されれ物すやた

そうきハ甚ぬべし　花扮鐘(フスマ)ハ六穀(コク)をぬきさまかきとりて
粉をして餅めしてゆくて耳蕩とうきそておりもありき
はそ小行の前をとして手ヤにうくしてそそまへし
ときそてはさ出して長姿双六の調度れてとくさおそや
うけかの地の(白紙)いわの事くようともろくの人のはさされ也けみさ
気しせらるまにうちつてさてあをもく気れうそ
女房乃ねまへ女ほ　紺そうくを可引人のおはすや
はへうさねとも行る地そくむまつこ二十さ悔くまけし
女の車さとおり人めふきをとくしそへきとさへくえゆすし給
えほ　そうき出す及をはとのへや
七月乃秋后れ夫の行ら悔やしなひあれし気の行めへく多
うるさ　昭石十文乃し給也
宮れ大夫をとして食上人上達ア殺ちるそ気の行へり

内にもまいらしめして宮のさしのへくおほとなひ給ふなるたとへは
かくてこそとの給ひきて　中君乃大事也
けちかくなまらせ給へり　内より御消息あまたせらるゝ也
九日にも大殿よりはからひまいらせ給ふと　夕霧よりと云
やしなひ給ふとや
よろしからぬをおもほしわするゝとなけれと宮の御かほさへ露わすれ給ぬ也
御子の君たちなと参り給てなへてくいとこそ一夜まゐりけるに絶
てたまはれて
あさましくも白宮の御ほとを治まとろへて志給ふとや　夕霧ハ中君の産し給ふをとふ事と
内にうちとも尽ころ猶さらしく心ちられるやましきにつきて
とんはかくおほしわすらはるにかくおほしてしかくもめし
きこゆるとも猶ほかれと　中君乃事也
まさしくたへなきやしなひ給つへん　薫子の君桃判乃詞也

大殿君よりきさへとおほすおほえて給ひれとゆくわかなきこ也
いさらしかくやむすむむ又宮乃けんさしとひとおもひなし
宮さへみなをくちおしきれや　中君乃けふのまつるを給へる中にも薫心の事也
薫の心也中君の心よりくやし
かくんと白宮をと給ふと給んや
又くしかうまれんとさてこそ一夜はいとこまかしくこともあり
薫の心は中君をかねてはわしせしかとこゝへいきて　かくてその月の九日にまゐりみて菊はなれ宮の御方さえきされ
るありて　女二宮乃御事也母菊薫乃かしまし
かくれにお給へとも薫の宮のとはかや
又の日あんな大将参り給へるをとへ思ひあるにまゐりかは
あれことひくさて　女二宮れ内まゐれ次日薫乃給ふ云
有しきりとかくる也

かゝる人のはかなかりしつきに　葵上にかしつき給

との源也

たゝ人のくしなり給そなたをわりなくみ給へる

葵の女三宮人まち給ふを世上の人たゝ十ばかりの人とも

はる給ふ八月まかうとたゝとうへ給ひを給ましき

ますうやそうしうてまた思の給ひとも有なれとおほし

さらぬるなり　源氏の葵上ゆかしく給ふのうと云り

まうくし見わりしまほ源氏まてきこしうるれ

源氏の源心をと云り康てや

まめしくうれまてあれうたいまてあさきんをおほしなされ

はるかをあると　葵を源氏のおもひ給りんとも

源氏の源むこにたゝ人そむけしとおほしなれとかくさ

うりれはしにたゝ人のやうにむことりいそうを給へるさそくひ

ハまくたくや有なん　源氏の天皇源氏の年又た仁三此殿給

まかまへを例によりて君かおもはさ例をと引給へり

略之

たゝ人にもかつしろきとた人の内あはしまくせさり

夕霧此事を

若院とに朱雀院の源もみえりおもしかけ給く　源氏

の上をと夕霧此藤氏宴此前まてかうさ給ひへし

とへとやはし給しきをにし我らの此　朱雀院源氏との

まゐ給をんとそれきけるるや

母宮とえうまうし給ひしう　葵此母女三宮と源氏の君給

ふかまもし給へるとも柏木さぬりのをとりかひしやとの

給ひつまるも　夕霧八ゆかしうて此藤氏宴をとかひさ

夕君なりや

宮たちをさへかく用ゐ給はんこそかく人もいひ給ふへき事なれと給ふと
もて　落葉宮の心也
三日夜の祝を大殿へもてなし給ふ　薫女二宮へ参給
てまつりし三日の夜のあるしも大殿のとりて女二宮の伯父也
母后薫の兄弟也
彼御かた此所よりお方にたまさかに給はるへく　大殿へと
ちかきめてたき此人々なと女二宮の御ためにはこれへよはるへき御方の給付給ふと也
あるしに松明を車給て思ひやりあれとこのこと也せんなん随身
車をひき給ひまして後く給ふ　家司也女二宮三日
夜の祝言の薫の供の随身人々へよろこひ給付て禄と
下されし也
それほとのあるしをもわかくしてとれやうみそ宮のかく
てのしるしひく所来給　こまてまれやうあとも

色々の御はかまなと禄とも給ふとみえし也
ものゝあはれ知るへきころほひ世の人ゝの給はぬとは思ほしてなる
の里の相手あつかひたるかへしちとの　大宮の事給
薫宮達給ふなと也
心持達へ御方の御ゆかしき事給ふなと也　薫は
心より女二宮を十分にはおもひなさねとも御さきの御とかく思ふには
やむことなき人へあはぬ給ふ事もあらかしおもひ給へる也
つきかたにとらるゝ也
あるまじき心地より何と御心にまかせ給ひて　薫の御心
また御消息すれるまとこゝろを
まかしてさせらんやとおほすしたまへてける　女二宮を
三条院へ渡し給はんとや
母宮の御もとにおはしまさで　女三宮より女二

宮れいけい殿へまうのほり給ふへきよしそうし給ふとも
おりしも女ほうたちゆふつかたにまいりて御かたの給へといとかうし
まゐらせんとて御けしきをたまはれおほひすらうをはなちて
おはしませ給
　女三宮のお方にさりしも御所々を女二宮は
ゆかり給ふ中の給へとも薫辞退し給ふ也
おしなへてにはうちなひ給ふへきことなりと　女二宮より
　給はん御もよりの女房達なとにかくへき事也
東のたいにも右大臣もやまとく後の院りし見わすくおも
まかりしきみよく見給ふ御へつかさまうにたつきし給
みかたにはうひまうらめしきことせ給てはなはたなくう
ときとうつりひ給ふんともいて心をおほしたりやつとさそゆき
とものやうなはおもしまかん給ひしまうし給ふ　中宮の
給ふ也　女二宮をいて福もなく三条院へまいし給ふん

　うとおほしめさむかし
女宮の御すゝにはうひ給ひける　女三宮へゆつり給ふ也
給ふ女宮もなくこれをもとちりん中すみやを給ふる　女二宮三条
　院へうつり給ふんとあるをゆかりの文やまの給ふ也
右朱雀院の存生にて故宮の御ことゆるやさしとある給ふ人
又ゆかりの女三宮の成給ふれと存ニて当今より給ふ也
かく世代を是を給つれともとのへをはるかとも自にはなれて
うせさせ給ふるにはるかにつらしめし給ふ
　女三宮尼になり給ふ事也
給ふうひものを中るかくやんしきもけんさまにうつりたる
給ふもなくまてつらさきうなれ給　中宮へまいし給ふ
　とものまとふ丈子より尼宮と奔走し給ふ也
おもしろしきといふるにうなかんむりのうちとはつ給ふも

気しきをたにみせ給はぬハうらめしけれと宮の御事をとふらひきこえ
給 薫乃御事ハ宮にもしらせたてまつらねハ心よりほかなる事也
宮の御方の若君の御祝ハ人々もしらて それよりハかへりてあるへし
をとこ君ハきこえてこそあらめとまうさせてみな人くちをしく思
ひけり人々みなかしこまりてまいりしつらひ給へるさまハ
ねころにかくれなくいはゝいかはかりかたしけなき事にかは
也給へる
御五十日の餅人の事也 薫の五十日也中宮の若君生れ給て五十日めにあたり
百日とハ生まれて百日めに餅をまいらする事也 子細生後五十日と百日と以上
花鳥 河海略之
まことにしらせ給はぬ事なれはいかてかおほしよるへきとも
いかなることの御よそひにかあらむと思ふ 細工ともの事なと也
おほしたる事也 薫中宮の人々の事也 白宮の御方の事也

ふかきしおもやあらんおほしめしてもくるしきやうにてあはれなる
ことのうちきたへたいふにもおほえのみせもむつかしけれはこゝろもとなく
おもふとこゝろうきとハおもひきこえ給へとなにこゝろなき事をいふ
中宮のあまりの御心也 薫の権大納言を源氏と思ひたまへるにや
あはれ一段おとなしきものとも也
心のうちにて思ひめくらし給へり 中宮の御心也 まことにひかる
人とハ源氏をいふ 源氏ハ薫乃御事をくるしきにおほしまとはれ給ひしを
されと思ひなしてくるしうおほし給へり深くしられて 薫の
権ハ前をおもひてといふ物との義也
心のうちにおもひあまりけりといひあへりとの御心のあるものの事とおもふ也
ひかる人の事をおもひたまへる御事とそ 薫の詞也 女三
宮のあはれなるとも
あはれなくてそうち思へ給ひ 中宮のおほしめしきこゆると

の給へるなり也
いと淺ましき物なるらん人をこそとのつらき川のみをも
思ひ侍れなましとハの給へるを　中君の詞也女二宮と給はゞ
たゞやうにの給ひと人すゞやかさるらんとれ心也
かゝりめてたきを本とするまゝにも本くさまに心もくれらき
自ら給ふらんいかなるさまにも哀り思ひ出て給ふおもひなるを
おもひとおもひしるき給　女二宮の御神子も薫のんあく
さまにハ大君のまゝと思ひ給ふとれ中君の心也
おもひをましるらんやは口おしきとおもひいて世にし給へと　大君
のなきあとのとの中君これ也
うきにもわか宿世のやうなるやうやかならしめあらかとてもこへゆ
あるらし何事にも心ありそうはせの人めるしきをもなほま
しるきものをおもはゆるにそ　中君の心也大君のまゝ

さく行て薫のおもひ給ふともおもひとれ女二宮の御かたに
物をおもひ給はんとも又其宮様とは其君よりもの思ひし給
ふらむとなり
いとゞかくるきを見てやすまんかとおもひ給ひつゝ心はとぞて
ハなおほしてもしらぬとおもひてうらきた給
なくてまて給ハ御心もくしき心也と中君の今　大君の薫にいまはの
おもひあるを給ふとも
かく君をもちにゆるしなき給へハまたしられと行のハつらくて
くかにまかりあらん　薫の中君の所にとかくさいまの給ふ
なきとなけるひとりは侍まてもしからしもなると思ひまゐらせ
かくてかへの所なるにかゝらし心ふ人をかくハつともかくともいふ
なきもの給ひて　中君の心也薫の彼ゆるしてけるにいひ行へ
まかりハ薫の心ありあやうしとも

あはれしてかしこそさまを見つゝ　浮世よと薫は見えたまへり
かくてや
さしあたりしとなれど見ぐるしからんやうに　かゝることゝめの
としても出しやう浮て事ハ心あやめくしこそしもや
人あると思ふさハ宮様しくれも薫ハ右大将匂宮なれ
ハカなくもさうその御やうすをもえ給ハ右大将とれむや
給ハしさまてとかくうけくしてそのやうに御覧しう
ちかくいふるし給へりとみるにかゝるもののうくかくれなく
うちゑまれしこと　薫のんや
よのつひそれをとくさすかあるをやあらん　薫の思召
やんのうこされあらうとや
されとハかうひさかの御給しく人のうれはしの御有様にてうやう
あらんをとゞめとゞめ給へきうにその御給ひて

大君のうすやあらうまじれそやうそ給ひの御やうさとそく
めならて宮薫のんや
こゝろあまくしまたなり給ひありけれいけしうもと思ふらう
めしそあるまじきとくうすれ大君の御さたなあれ　女二宮ハの
つうけその出うんとはしめるなおあまりしき薫の心や
世ならぬ御やもとん不すくやそうんすれや給へりなさて
わりましは御腹よ浮そのれ出来あるとも思ひ給へぬる
ゑんなゝるやうや
かくめしし給ひきてまたむするにしてつとわしくれ
うけとらむへるらん人をと見えてのそりわけなうらむたらつき
てむつひ給へぬるとおもしものゝ数　めくしかへ女くし
こゝろや給ひきてハうつくしとも云りも八御乃式アう
薫ハかつとかにうさるて又やうて女の口さられさみちれ

心ありかたきなるなと
梅ことにさくらされはこそさきてみむとしおもへはゆかしく
そのし給をあはれて　　荒木田人まてそおもひつゝん
ものや
さしそへられさき
　あはれとも給しゆかしとしもちひとやもとつゝの御事
もとにかくさとるへき給ひとりへくもつゝさとるはれしとかいより
さ給ふるとしもやうにゆかし給ひ
　荒木田ゆかしとも　　荒木田ゆやかな
くまこしれてなりとく給ひとはにかしまいらせられ
あはれはいまいらすけくしれてゆかし
　つらきられてなきしく御給とも　　荒木田のものやくのさ
おもしれへの御あはれひや　　荒木田給ひまいらし女房たちれ

ふるの御や
ありつましくやらやうしに言ふとかなくへあらんると
古
おほきほ袖して白く梅花あるしとやうしに言はれたく
まつりしな　　女房さまとれいまいらせ荒木田りしまいらせて
まつりしもとものことに
わかなへとなりと
夏にはしくにと三条のきなかくさに給ふしにあかへしやかなて
夏ははまれはなてい給ふけいとして三条宮へまいらせしてまいらせや
四月のはつかうろやうゆかしとうしかまいしきにさかにまいらせ
くしまいらせ
　四月の給りつゝぬさくなかりし三条宮へ女
二宮わさし給へさともやあたりつゝ荒にかくさしい給への
くわりとはいはふとつけくへ
ゆかしとてれ日なかりつかにうへわかしてゆかし

三条へ渡り給ふとて紅梅の白き御衣の女二宮れ御さしへ
くらき所とや
藤の花乃えんせさせ給ふ　此巻女二宮へ渡り給ふ給ひ乃也
みそかれひさし乃かんはあけてけしきとりて給り
御心の内に源氏ののしや河海抄等略す
おほやけわさにみらるる女の御はらから給ふは
上達部殿上人のきさやかなるとらはらさきうつくしきまかり
女二宮のし給藤の宴の御はあるは御心よせさせ給や
のんのと人やをわさとはかなるや
右大臣　たかのぬし　夕霧乃事也
按察使大納言
紅梅り柳くるを紅梅の大納言はしめはとまつ人にあり
紅梅別人と　紙可紅梅也
麦中納言たち藤のうち
麦人の方に親舞の時の見物人

みこたち八三の宮の御いるとまうて給ひ給　白宮の
るり　堂薩宮ふそ同御事也
これみの庭れ藤の花れもとに殿上人乃座まて立かるところ
う殿乃をんりしにかくてそれへくめして　紫の上のんでや
吾ゆく程りそうてう所うらへの内わ横ひより宮れ此くから
清らくも笛なと出させ給へも　女二宮より御琴なと
いうし給とや
おもふとて絶んなりて行まへりくりつる給なと宮藤
のけてつくりのき給て　夕霧れるや琴なとをもちて
気給とや
入たの宮より大まへせ給ひし　女三宮より源氏のおそりし
宮の御事をしや御事やもや
きんの女三宮の母の桜つりつをたるなと　匂宮れ御女り

勤子内親王とておはしけるは九条の右丞相おほきにかしつき給
ひしに後並の安子女御と申せしは御母勤子内親
王なり延喜の御かとの御女(サツ)にて院のことくなし給しやその後
と又勤子内親王をはしめ安子女御の事とも給しやうやく又延
帝村上天皇にも譲りとかくしを給ふと御あらく今宮に
ゆつりて御その譲り給としけるとは云なるへしや
なと案天暦三年後並の女御安子をさ九条大臣相の御
女也延喜の御女勤子内親王は是也ち九条後家室
に嫁給ひつるよりそ延喜御子の勤子内親王に
給ふを給ひつる箏の譲りとかなる事とも此物くらに
六条院の女三宮にたてまつり給し琴の譲りは云なるへしや
河海抄に此説粉もとうとくしるてにやまた新説大略同之
也とし見て記し給
　薫の系物琴の譲りとかやきこゆ

清き給ふ也
はかなくおほしけるにこそ巴和琴なとも朱雀院の御物ともかな
なると　女三の宮のはかなくして薫に伝給ふと宗の兄和
給ひなるへし
第のうちの音かはかなくし此あしつのつゝと又かくは箏のねなり
やさめてさるを給はれたこの折のうちよりとるより又そのうえん
まへしおほつかてのあらんと思ひして　柏木より音まつる
あしゝ第のおもや
とよりて給へる事あり　薫の秘蔵なれはこそ出して給ふ也
おほくまえん三宮も見えるとさりくに給ふ大将の御節は宇の
そせらなれ給ひのうちより八高か又居く給へる后上人の中にも
しやうもとにつきあへぬをとめしおほくありたくと何をそ
是の御すまうすらくきしせ給へり　女二宮よりのきこえや

杉鶏ハ前に注く
ちんの行しおより来る人の手すりつき蔵れむしとれもちし
さしあらえさぬへたり　蔵村流打歌ミと
悲ろこみれやさとさまり此流さの行おへつたらん当りたまゆさ
常に菜をとりまやつきさとれやうたる抱まや　河銀楊照
或葉菜　親行流ミと
わ　流まへの抱りあるらしもにことめりたる静也ミと
鳥来雀の流まりさあひ流らりまつり結　舞丁さ乃子玉鸞北
腹や流さくたひ之流敵なもとまや
流盃菜の結り抱とし来ちらすそてハ引んあらん
天盃をとりて蔦れ当とハりしみや屋といてくるとのころ
とさりてさをひり
永めしちれ流中あはたる人まそもあらを申ねしたるまゆつりやのミ

結とさらゆとゆ結へて　白玄をのさら此家を宙人今
乃流よなまれし蓋り流盃をとり書ゆつり結也
流るしおハて消えん　当りもて然と旨たるあやれ之也
流さりつきたきてをしとの結へる去えはらひまてるさしき
へ立ひのお月やをるりたれとくまみとみゆるもミはいとく
刀剣すしさんちみるやわらん　蓮の流さや花るみもさり
結さねりしりんくたり流海乃流をあらさ結ましいつり
むるあはおしやハ流去れ絹まやをおりとを年道遥
院殿勢人出し結まハまつり此物結りをしとひる絹刀らし
たりさまハ抱るし来くをるたへのおし喜たなしとれるもと
おこれりしとひるむらとやこの物結まひるも蓋天盃たと
昇　松陰少納言抱子子元
いてこミ結附也たりさとせいを承知まやとも
ひのおまし此らくに出ての来るおしき喜あるしきそらひま

とゝしくいふこゝろなり

花
賜天盃例　天暦七年十月廿八日菊合式部卿親王重
明賜天盃寛弘四年四月廿七日宴中務卿具平親王
賜天盃 以上賜親王例 永延二年三月廿五日摂政六十賀入道殿室町給天
盃永祚元年二月十六日朝覲行幸御堂殿給天盃同寛
弘三年三月四日行幸御堂殿于時左大臣賜天盃同五年十二月
廿日後一條院御百日御堂殿給天盃 以上賜執政臣例也 今案此後嘉承
元年宇治殿嘉禄三年京極殿賜上皇御盃寛喜三年
光明峯寺摂政永徳元年室町行幸鹿苑院大相国
等給之也 為後学次書之
さかつきといふは河海乃流ハみなと案也一向よしなきかる也
志まかりんとあれかとてまたこゝろんと八志くもしかるよ
これたまふるやと孔子格言(カクゲン)をあまねくたのしむにや

八元右京大夫に給ふ永延二年三月廿五日小右記云摂政六
十賀也左右大臣起座献御盃右大臣取御銚子奉上給此
盃於摂政式開後給寿言(コトフキ) 或云寿辞 摂政又有答奏
可為死 摂政下庭中拝舞云々 摂の例もあれども
しとかへ頼云まつきたるみなやうらん志て給ふこと
ゆくへ給りて頼もちくそく給ふるかとゆてたるひ
事也 天盃を給時は去盃をとめて給さかなの酒を
うつしへそのむ物也まかうけともしふくとれは盃
給りて後さかつき乃待ちつるそて御前よむらひ
くゝ去階して庭よくりはうちゝ給ある儀也とと
天盃を給ゆうち去盃をとれまてうつくくゝ給とゝ
御天盃をとえ去まのもゝ盃まうけて名とい事
あるや一勤去盃のの給験濁(ゲウダウ)をとうつてのむをまゐらせし

くとふや雲天蓋と語まる時定たるれつや　一勘
精時定れやと
よらうれみとたち夫人ちなとの語らう語ふさひめてたまさす
なる気もハまして清むとみてまそやされなり語らる
清忠申し行らうあそもめつしきに　まんてとカ天
蓋とつてさ見さ人にもあなるに薫ハ将大納そみくちる
わりさるにかられんや
語りあきとはくてるとたる辞りくつつき語つるかとんく
語しなまてそ見てし番毎　薫夫蓋とつてに紛ハ
めそるされたる侍の限あれもれ辞路して擬なるそ
束庭よ見語らんくるしれまてみゆるとも辞路とい
是つきとして操とあるるや
何せら大納そハ家らぬてうの中めも見てんやさあるしる語さ

わりさやと思ひ語へりけ之れけ母女御とみそ若んかけ
え語へり第るの戎高り御て給を移思されまぬはさにゆく
うらひ語てくちてハ之めもとんまいんのかつさたりされたれ
らしろとのそむ之しくさとめりしとそれときとしめしるに
はるへもなりにき事はいと心中まり也之く　これを
紅梅よわらもとあれ大納言と心語へし此人女二之女乃母女
御は父大臣の家よおつるし時へをとりと語り院よ母は
り年語へて不及力して作るへ女二之女のろうえに
とよ語へるもけへやもに入語らそてと薫よおひ語と
役るなよわきとそう
人かくハ哭てとたれとあ発時のみてれととくしきさまへく
もとうつきら語へき　薫ささよのへりれをとすあると此大
納言んや

又あらし　清水の岩へと箏に乗てうつゝ給ふさ
京くひたれたよく梅宮れさし兼也
其のへのうちにおりしまた夜ちらむ又待りてあてハえんや（くもんのうちもよきかなして）
たまりやう金やをすてさうの隣くるよハ南く以ましうと替し
ア重清み中きや給ひかれとさ他つゆりのかれて来りて人の
泊りまてんてうちの給へりき隊　九るとせん紫中此るり
をと立り切りしまに夜とは女二文の切りしまひと夜恵
のるや是それへ美の糸り竹て清つまちく月給ふひ
ころするや乃心やみ連さへ有り給る夜の家たに
やり中やて消ゆれりし清き給ふあまのりしさてるとと梅窓
乃御箏ま奴給をぬと服立給ひり文くまてしてを
給ふとやされと行をゆりしかれハ夜宴ま人来給ふとや
志えく行して京よもま隊　夜の衡やうるとあまく京

あとしなのきろ清さまや　紙燭まや
うんたいのりくにりまつをく伺とれ多し三きはとのくし
たりうかありかれとせんの以うふおやしきに南ろあそら
久んとたやまはあるうちにみあと立てうは　せいの
以てにおやしきにふのあまたりかんと云ひ中重はとそ
彼仍志れ式部の相や此御まのまりたれをめろしうぬ
よて京た皆うぬとや
うとゆまちゝとよろしや～て　一服上扇とれるりとさり
河　寺入一と云合を二まうとおらに思あらは為しく
新　上の町とふらをとらうれ不たるへし
清くちつきさるも八左とたすれるり見くさめれと志るしそろり
とて。ひらり南さ川そとひ中なるひとうし　京れよくとな
きてとや

是ハ大和の是れよりて行うさしおりて来り給へり歌り
也けり。　菊の花を手折りて菊乃色をわうさして来
給へり行さしと云り
もろこしの人のうさしにおうと菊の花咲ぬ枝の枝よ袖うきてぞり
菊の香をもてうきといは此の時のすとと云り流為ののうさし
にほふと云り咲ぬ枝とハ女二文よおもひ給ふと云り
弁　咲ぬ枝女二乃ことによれり菊慈乃流女まもたのみをあけ
うけたまわりたるりみてさや　菊乃露のしけ(?)嘉(?)年のかに
おつくしふよみたる代みてきと菊の地よいつるや
萬代をうきてみやらん花なれハうきもけりぬることそされ
此つ時色んハよく家しあるりや任あるぬ文と残菊を
さしての給へるりや萬代かけてとハ真義なへし也との
りしねやうけとの給ひへし

河
飛香舎菊宴　延喜御時
かくてこそ見まくほしけれ萬世をかけて白ける菊波乃色
菊ハ菊の異名菊乃号あり
花のたのしま(?)ほうさしき菊の雲よおとしぬ花のうしきとり
夕霧　菊の菊をたおりて此つよまるゝと云り 黒き
八雲立とて自からの時まいりしも来る雲みとおとしぬる
の花といふちひゐかるんや
河拾
菊の花やとも毛みかふ菊の色あれハみなれあらしとあらん
拾遺集　延喜御時菊乃菊花の宴せさせ給ひける
よ御ことのまとのことも和歌はからりあるに菊原国峯云
菊の花都の内らんの菊のきうとのとたあやなまうられ家る
弁
猶とも作名まし花と人のかや
菊の露ことも見ぬはを井まてもちのありけ面菊波のされ

梅窓使者　蕙をはなてよの情よれ人ともかんと侍り
しや雪れ山とちちのかり給ふかとなあらるんや
こまちやこれやらたり大納言れ寄りかんとこそう録事
四十
梅窓大納言れ寄とあり并れ御雲井とちちのかりとよ
めり蕙のるりをとらへるに紙をりきと
かく人をえりことにありや有りんかやうにおもとなる恨れかりしきふ
しとなくてのこそわるりし紙かく每まうに情何をむいと
特りろく　例の式部をみりを畢下して筆の調や
大ねの君れお那なりとうるひ給への数文そうきかともなくめ
てたるかと侍る　蕙信馬楽のうるひ物うるひ給や
あきらかともむかしもくまぬつりし情数文の名録をすれをと
をいと物くしかそうらわれを給へり　こゝのよれ
人をおりえてなよりりし六名梅のるすともいへり

六十一
左の大臣の后七郎りうえよろく情うれ第一よくいとこ侍くし
うりのれを　夕書れ七畜め息の子や
情秘を給のは　情の情家を七郎か見まりの書給ふや
息の終り文夕雲方座上にて舞踏し給とや息なと
十猶の附文れ蕉卑侍るくる宮まれつるくこそ
押さくおりてよてうし給ふ暁ちりかりそりてそのへ世給
ある　情の清るや
給くそも上達部みなうちよはよろを給　情より為下や
底上人かくそれ人くよは文の情からり志れくよ給ひ
なり　萩襲するも給ともも給とや
そのよたりちん宮さまてさをなり給なりこさし紀いとん
寺とありら人の女房さあうく情をくり清きまうせ給ひ
ある　萩のえんれおく毎日れ夕るこのるや　女二文上条

随へつかさ給はさしとつくり
むさしれは車をくひきしてれいとけむつこまはくるまむ
川たくみむつきを丈あしろあや川　むさしれ車みは
一條帝皇の車也きを女二宮めにやこうねはくり
と八ある車に金みそかれをのうしろにかへつり
は　庇ある車　糸毛　今生　檳榔毛　網代など
見しんちをはらん八人つくさふつふり　いつまての車にのり
ゐし八人つくそそおしろ車ひとゝつに八人つての尻とぬきや
又はいくへのはし車とてと十二　三条院薫ちるとのは
逢の車をたゝへし
本所の人くのきてちん有けるはをくりて上達部座
ふ人々侍るといふうちるとたまはさしがはくさせ給へり
薫より此はむかひの人このりたる也それと本所といへり

かくてんやまくくらとけて兄宮の給ひけるにおほしまし
おはしますやうにおもくれたまひやうにかくこそみ給はるころ
ありくあそもれいもくせのほとくちわりかたりけりとし
心たかうしもせしる家ね給ふ
薫のみや三条院まてのりもや　薫のみや
とかくいうろ薫てまはしくこなたのあはれをみめくれ
ありく物のとをおしくかる雨ゆきをはへる人ありくもちあつめ
はへさわさあり　大将のみ子也
御よ物くてまたおやしくやうくみとも家来のほとりに侍
のむかひてはきしめて思ふ此先ををて寺れいふにまは
のことをとへつさ路へつかはとりさつりるくさうくしき
もくりしてかく白れ物まさへり家給へおはしたりはくして
路へ行宣旨路くさへるりてさきとそのは路　薫

のちは世すたれまおひく比世まてはいらかしハ何の
むかひそや田あさしあんとや
たくまんのくちさればとて丸殊へきさんか布施をあたへれ
も設ちる比たまおちけるに　蕉れはくちき殊寺となん
行て又きてくれ古き家へよらり殊とやここに行ま哉
とく以るは前よ弁ね尼寺に　蕉まつる行ま哉電とや
とりきやさひとまそるる経れのれしさやとよめるにりてや
女車れいとくし乳たまゆはあしぬひとり　芭へは錯乱
初瀬より下向れ車や
はしまし乳あつまおもくこれをしに相拍へ承あまさして去
もとくへも数お福くあのまへしきなまはくしさ行くてからう
ゆきよりかとく承み面るけ記る拍のれとこ殊ひて　矢
いるきとまるとまや何つまおまくこ空ハ常陸ものかりて

のちま殊へし
度さまり入行てこせんともやまくこたちさり兄あの経り
比車もこの家とたしてく承なりあつともみ　蕉ハ
家のうち人へ入行くや
こもいしんこりしやくやいるそせつ行ていんをやとかを
殊人ハて忠うちゆかとたるもの乾ちれせんし度の旅菟れ福
瀬の丸んてくにまうててもとり殊つるちりそしめもこに亦
んやとり殊へりしやかに　かやくハうし申しく女紀也
蕉のせりし殊や
われや安くし人るりさやお拍し出くくへくとはことやうたにく
し殊ひく　蕉の乞やわハとはおとさかくあまと云やう
の洞やたくハまは智ん兎みて在まとのんや　荒おいあらう
とふんさ行るりみまとに心やうと

ちやは車来れよ　　手習の君の車とくくらせよと薫
かへしていそぎやらるるや
これ又人やとらせ給へとかはりて江ある也いはし給はも
かへとも見なかりけるやなくしなりゆきかりしともなけれ
とれきりいやさるかな
ともそ道は小野にみ給ふしといひもつ宿也薫は小野
さての山よりつるや
見かへりきにそく馬ともさぶらはれきなくつらしとまうり
侍くきれ御車はいまてらるれ所しかば月のそよ侍り
手習の君は侍人とも薫の御供の侍りともいへくるに
まうるるとを給ふ也
さんてんはきくはしてみくさとられとりきにおんへて
あたる中に御さまん尼にて居るやうしれなるやうを

若の古家とは室りまてあさくしと人文ばくし道
たれそらまさに行しはぬへし
のさる文給　　薫は手習の君とのさる文行也
侍きれなれいぬさとるさて家にとしきしぬかれ浪とさて
そありける　　薫の御使来れ御れは人まきられしとて為と
しけりぬきたきつく給へるや
ことみも打つちて若き見おもせるそこしてめくやんことな
きある人のおかれたるを　　手習君車よりやのてありぬるも
まま道そるとわるるいをも給ふなる人し
尼君はこれやとらせ給へをたま道そ給ふるや
君そ車にとてられとや給ひつるよりゆめそれへとまうる縁と
の給ふまとまいりくちかくめさを給ふてかれてこれさらなる
ちやくありさせ給へましうさへは物し給へともとあまさん

とゝひとつしたりわれんのあるをれわうまてこれうちあく
めり．
天下の色このみ 蛍也 源至天下車を見給くるの矣
尼りの語ハ常に家にやとりたるをしる源至天下
のほるとの事にてをしる語也
清せんの法さするをりて内奥まとりて出てめやもして又おとるゝ
至る所へ今ひとつもおりてこゝをやとりてん
見えたまとあまりたるにも紛ぶを車よりきたるさんにわりた　此語の人の言
れわりの女の中で可然様称とのゝも
あやしきをはしへ去る心ちしてそれとりふと思ひのわられと
はそてやうにせまも　源至天の詞也
是ハ女のはなとの中にてそきまをくも打ちしこみての事き
そ給まゐ傳ふ心ハ又いつてのあらしハおす所へつきてやさし給ふ中りて
いふ　奔尼さるれんの詞

浅ましきことなれどもまいりしつゝやうたへはるや
うたはてたるやとはいふとぞ　源至車よりをりの語
と蛍のおほくおよびてのさまや
出でひ出しまねべしあるきとはなれしかくしたまへりのかほを
見えしぬほと火をともさなくて出さうちつれはくと語
蛍の火也大天よ源至天のよく紛ぶ所と云ひ出語也
車ハたかくおろく所をくるとあるへくんハ中をしるにおり
あしほきや　むかしよりて女の車にありのる時ハ打板
と云物として車のまへ板をいふなり乗る時より
ふる　弁　女乃車よりおりて母は前板より打板と云物と云
てわりてくるも車宮母はさまに此物をかけやとる
いとらおしきにやへ見えくる心しもありていさうをみるらく
ちさしに存す所しこひて知るしよりはそたまう　源至天のさ

まや言見やよしく見ゆる心歟へし
かの事へ色乃うちふさたり四尺の屏風とは乃くしにせん
てそてゑゆるのかとようみゆるなれなきとも誹り云ふかしこゑ
たゞとハうしろめ多きにえしくおもさにまよむきて我そらひ
多しぬる　歟　うちとおとのもとしるしるや其れさぬの
色やとゝ　若苗色
さともくあしきにおほしたりけるかれ　二人の女房綺也
乃智天の子とひてるや
いづミ川の舟わたりとも海よくになといとおそろしきこと乞
有つき　えそこ川のしのるすはよるなへし
河
泉川　木津河と云也日本記ニ挑河（イヒカハ）とありと川なり
又考ニ成る也崇神天皇教云比河を中にして桃
鋲府ノ故也ゝゝ　同　造舟（フナワタシ）　文選第二ゝゝ

古
宮も九く年三日ノ京ハ川淀風ゑし夜ノ狭ノやさし
この二月のはじめのほどなるにしもまゐりてまうけしけるといひそや
あつまちと思へるつゝしれてそろしかるとなかにして台にある
しやむさしはつひかるらに　其乃比色紹瀬り集語や
かへしたり
おほかたはよしともやさしとひさしくおほかたひかりとかくしてそあらつまま
ろうたわしとなるひとを　乃智天乃ゐるや大陸
ちるゆうらとなとれ陽り志うよく似合たり
知うら度るをいふくもかくには海とみおりてまりやうくこ
しいふれまて美紀とくさへとくの夢のひやしとそてまと
うこうて見え給ふに　薫乃んや更俯乃むとめるとくい
はんやうあはなれとや
かうき人わるみかうしやかましきことの心もとれ尼君のた

さら結構やあらんせおもしろく　しよ舞ふ花女房蓮乃白と
どうめたくさや
わひんさとにわ此めでそこのあるや　もちの舞ふ
のはきし結二人のうちや
京人をたかいとこ此こや至りにゆまありしされ　都れ
とはちらんとある時ハ弁尼をさして以つる如へしこや
ひうとは情ときうれんや
天下まふあんしぶるるとわりしたちしとあつききてくう給
争ときかの意をさえわうるを出結ハ活りきうしこの活き花ハもそ
さねうくか活りふ地くをれと活りそくつあしまはしくみひ
い給あとみむとひへとてそらしみそ活るやうるとちめみるさ
つと　常陸国まてれ蔵勝乃るいとこり
あるくのをれこするとわうしまさてゆ経るると系しせ給へと

ところきさきくとうちつきて浮しい敬くもれそうまも
とつて　弁尼のうちら蓮女来るや
さてのもを結さる　物語るや
これ今んせをおこをみてわきさねをつりしてくるとるとや此
まのうやけろくとくかを　し舞君さくこくしまてお
こさ結つあや
やまてぬ心ちゆきはかきりしつてそて
ここ結とひう　蓮のんやし鶴し
きさゆゑの給へと文様うしもまりつ行たちまりくん結これよ
つとさ活るこそもうへくと　蓮のそれさてくさう結系
結とや　河　退こと
右乃こあをえし絶えくさてうしこにかうちられともあてちるるも
こく結あくまてかんあいめ結へとおけるをおしてきめこも

かとこらへしはあまりの人々もまとふ由くまして
ふりや枯ぬ中にあはれなるや蓮の葉をうつとも
いつの花や　蓮の実人のみにもふるまひとんまもと
ぬしある心残り
うれ残とや
たゝとへは何とてなきをくれぬ人ゆゑるもなれへ人のなかれとく
まちかけりかくあはれうちに袖もしきとあやしおさゝるや
蓮のは智君とおもふうちにかへるとあやしきものや
尼君たちこの度の法のはしまもみせうたることのしいてしたりまき
まやはかなきやましとてつきの程ちゝかしともまをと行つる
やみに
ゆるさはなへき物なると弁尼のつまとも蓮の行く人もみせうそこ安
法ともれんくんきしひとめんひたりのおれとも
人にはかひしてや
蓮の法師

かなをとまつてまつるしきにの残しうれにこれはいそまわはいし
かまんかてゆかとにはうて日くらしほすやまととふくかくの
そらまほのいつんやはまてしをも　弁尼なにも君とはいまは智
かるもや
まれのことのうれかひかるとまの来れるかりこやなふやと
蓮の法師の法友あまとよりともことなと来りて参るとや
こなさあまもいれさる法おもつき人へもとにもとくろをとるとはたもと
わこなひとききてうちをかへしして　弁尼れかゝるくしとも
ひところと送るやとや
まことやそのうたにこさるやも　弁尼は智君へまいるや
けかりのはりかれく事ふりてかりうれにみなもする法のこく
しめこさうしてまれる　もしは蓮めの花残けのしや
弁尼のをとかゝる女へしおの相すゝ智の法人へいつかるへ

此尼君ハことにまゐるくほかのみやうもれとたちまちくのほ
ちかうりしをそたのむをみひとへとひとりしうに
そおほやけとほのかなるにそのほのかなる弁
尼のさうそくと今薫のものかたりしてまりい
とかくしるへくやとひわかきを修行やうやはさ
くやかにとの心也弁尼ハ人のとしくしきんと見
給へり
昨日わらひつきなんやまちかのしさもしとることもとて白
ともたちてハやといふめまてハ
下句もきのみとゆる歌也　尼君の詞也初瀬よりと
さむ人いと　中将君ハ浮舟の母女也
あやしきくへきたのことてさを行へきと
中将のうちを弁尼もりめるうち也
浮女の詞也

昨日ハ北山の川のわたりをみて　木津川なるへし也云々
行かへり道遠しきとの心也
と給ひもむこたにも恥なくひとかなんとかくへ思ひけるをハ
きつとも中将君出給はんとおもしろかりしと浮人の
と云給ひつまとやたるとの心也行　云期也と
落ちおもふみる所　中将君ハさ侍也
行ゑ尼君もちかしひくそてきたるかさりしあうれなるをとたい
とよくみ給ましたいとよしあるまされ給ひ給ひけれは
中将君弁尼とうちてそそきたるかくは薫のその
とへるれしよく見給也
これをとくろしをはかくとしとも見給ハちかりしけうか
なきれとも見とみるにつけてたくさるを云てらるくに給へる
こさおもぬ尼君のいとくちをはしたるをとらひ
薫の

んも大夫のまねへし　中将のまね也
女乃諸ゝにもいとまくみせむとや申ゆゑ
小督局も琵琶よく弾給ひけるや
哀なりける君の人かれうるさえる物をとゝもこゑもきこえてる
しけるとよ　小督局のことを業平也
これよりくちおしくかんきも此これなんゆかりなるに
てさふかきりまうひ申したゝむ人と見えては相ちかく思
ましくおもふこゝろにましてこれをきこえてまことなしとうけ玉
とまつをにこ女乃ゆゑにおしはかりてこれとたのみし給ひて玄
かきりとなくかく哀なり給ひしくおほしめし給ふ　小督局
より楊妃なとゝもたつねたゝやましてこれを入道あれ
清子なりけれとや
此ときをたひまりて世中にあはれまかりしとひるかへりてみなくさ

めされし　大夫の此世におはしましけるほとはおもひてもはよ
静御前小督局業平との業平也や
おもひしらるゝまてあはれくかんさしにかけられし給ひはるく一首の給
ひん清らかなるにはかきりもなくけむこれをきゝとく人なれとも
見さため給ふへききはをかはりしやおほしめしける代　是そ
玄宗皇帝楊貴妃を尋ねて蓬莱宮へ方士をつかはし
し給ひて楊貴妃にあひ奉る時玉のかむさしをさゝげて
給ひて玄宗へつかはしけるも是をかたみに給ひて玄宗も
かなしかりし業平也や是はまのあたりに小督局業平大
夫りよくかんのひ給へは大くそれをおほしめし給ひやこ
と人なれとも貴妃のことくあはれなる君とも見給
なれはすくさぬところはなかりしや
ころ人かゝり其の折かしかるやおもふ人尼君を抱給ひし

してさくらりぬ　手習君乃ことや
人乃しのひかくれかよひをもちゐくの契をむすびありしが也そして
かれそうちとをさるをもかくしつれはまうりぬるなるへし
弁ノ尼乃ことや
白菊もまていもをは君をもやとふらひて法そ斎とこそ給てそ
まことにめしつ給給ひしくちふ任さん君よりひく宵程なると
とひ給　君　薫乃ことや
われもさまてうしときまで思ひさら紙にかきて捨つへし
事いとの給へる　薫の詞也
むかし給せる事給しのちもは侍る人をはいて侍りしをまち
給しにてそのいもなくこの二月あまりちさん物怪まうて此母よ
つましもめてさふらへめんして給しる此母君よ折りしめし
朝夕給さんやのめし給しるれ　弁尼乃返答也前よ

薫此も手習君乃給こそをというへり
いとかなしつらく　手習君此母乃こえる詞をや
かくし当る此治る中へりしてそ給ふれるとありんとさへし
かの　大君もの手習の御給とのこるや
その比の御ひそのやうゆも物かくしまるほどもうけ給り
しわたさるんなく思給へつるにかくあんととも世のことはせ
給ふさふらひをとて　薫女二宮へ来物給しはのるるとよう
又この月母もまゐりて命きへらう給たありゆきさうつたも
乃中やとりつるは　前よ物語へ手習君まゐりて給ふき
二月あまり又との程とは四月也みそしたり前乃詞り
紫式の宗有とさてうち給もくしして此日給乃
程りまいの宇治へかくしたてまつる　薫乃宇治へかる
つかう給や

かくむつひよる御事を尋ぬるもしほあらひと見しやゆる
ゆへありきんまへめおほえなきさまにさいはひのみなくと心苦
へひきつと押し給ふめれと　手習君こゝへむつひよる給ふ
とをきくゝるしまさにひとつは文字の程ゝとまかりし
見えひとく弁尼と馴給ふとや也
まくおりしまほとも仍ハ押しまゐらんとせし也　手習
君より薫のこゝに打なきしまほとも申さぬとや至
ゆへありは此君ハ母君をはなれ給ひてありて物取へ参
給ふを此は手習君ハ中ぬなりと薫は弁尼也
内中きこえ給へとも思ひやり逢あるありをも見えし
とそにうち絶えはまたとかくほとなくもとも思うくれある
しうし
薫の詞也　手習君れ係る中きたる人をも
まてか給ひ給ふ有くしさはりますてきこへさう給

御もかくせとはうきぬ給へともふるとをもなれとも
らし給ふすやかくはれん也親給とのらや思ひやつまし
とは薫のかくし見消の給はとの給へり
さてかくまとへむひよりとも給はんて其中くんかもとお
なれかくちこきらかくてきん参りそはひあるや
薫の詞也　中くにも手習君より母の其ひ給はぬこの
かもそれもこひよろんなにかくとへきや思案し
給ふとや
法人よりしやの給へと　手習君は薫の御文をか
まなりと今うちにかあひ給よしと弁尼より手習君
へ給へよとや
うちつきにの川の給なる法師のやうちよまむて給ふ
かしこ法人給ふんやてかるに　弁尼の詞也

呼子鳥とも鶯ともいはゝやと義をさためて定かに知らす
薫寿　此鳥は大事あり呼子鳥と云も知らす
とかくされはよりて呼子鳥とも詠まるゝを以てとは呼
子鳥の声をもさしていふるも是より外にとも知らぬも
知るとの心也此呼子鳥は詠まれいふるまゝや又雉なと
をいふる也へし

万
呼子鳥はまれく声もなく春の野に啼く声を出す[illegible]

同
夕されはのへにまたくなる呼子鳥我にみやこへ帰れといふに

同
春の野に鳴呼子鳥恋しくはなくしてつれぬ[illegible]

河
或説云杜若といふ花といふ一枝むさくにはこれはなく[illegible]
又八雲抄云呼子鳥は云日山にあるなる鳥也[illegible]
[illegible]
[illegible]春の野をいふり源氏物語にも呼子鳥と

雉完完家に不知之といふ推之年々[illegible]
也未決之　又毛詩説梟也一名を呼子鳥と云
為説有之略之也
たくちをさむのやうにの[illegible]をといふてかたるとあり
薫乃此事をはさむのやうにの[illegible]弁尼に聞
きかたる也